

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

自由への航海

### 【作者名】

天の川

### 【あらすじ】

自由と答えを求めて海に繰り出したとある転生者。最強の力を有する一族に産まれながら、単身危険な海に飛び出す男はワンピース世界で何を思い、何を見付けるのか？　主人公最強クラス。東の海では舐めプ状態。捏造設定を元に書いています。2014/9/18、諸事情により主人公の名前を差し替えました。

## プロローグ

この世界に産まれ落ちて早一十年。  
違う世界で生きた記憶が有ると氣付いてから十五年の月日が流れ  
た。

この世界は地球世界と比べれば危険が一杯、天変地異に巨大生物、  
そして、凶悪な海賊が数多といふ。

世はまさに大海賊時代。

そう……ここは大人気漫画、ワンピースに酷似した世界なのだ。

海を渡れば海賊に出くわし海王類にぶつかる。

危険極まりない世界でこの年まで無事に生き延びた事が奇跡！

なんてことは、全然、全く、これっぽっちも思わない。

何故なら俺は、産まれながらにして世界最強の力を保持している  
……但し、自由と引き換えに、だ。

この世界に置ける最強の力とは何か？

霸氣？

六式？

悪魔の実？

いずれもノーだ。

俺が手にした力、権力こそが最強だと言い切る。

時は、大海賊時代……そう呼ばれていても、決して無法の時代ではない。

寧ろ無法者に対抗すべく、海軍は全世界に支部を持ち、各国が加盟して世界政府なる組織を形成するこの世界の権力機構は絶大なモノと言える。

俺は……その権力機構をアゴで使える天竜人の一人として産まれたのだ。

天竜人……傍若無人を絵に描いた様な存在。

前世に置ける大人気漫画にあって、好意的に見る人は皆無であろう完全なる悪役的存在。

そして……謎に包まれた存在だ。

多くの読者は天竜人に腹が立つと同時に、天竜人が何故偉いのか疑問に感じたのではないだろうか？

何故か偉そうな馬鹿貴族を、何故か海軍の最高戦力である三大将が護る。

読者であつた頃の俺は『大将が馬鹿を殺せば良くね？』と思つたモノだ。

しかし、俺の知る限り、原作でその様な展開は描かれず、天竜人に関する詳しい事情も語られることは無かつた。

だから俺は、自身が天竜人の一員であると認識したその日から、天竜人の真実を追い求めている。

天竜人の傍若無人が許される確たる理由が解らないと、馬鹿みたいに偉そうに振る舞う事など、仕返しが恐くて出来やしない。

だが、その結果は芳しくなく、原作以外に判つた事は状況から導きだした推測に過ぎないのだ。

不可思議な事に、天竜人について問うても肝心な部分はほとんどの人が知らず、知つても教えてくれないのだ……天竜人である俺が命じても、だ。

実の所、絶対権力者であるハズの俺の命令が拒否される事は往々にして有る。

例えば、ホンの小さな子供の頃の『お外に行きたい』や『裸に成れ』に始まって、最近命じた『最強の悪魔の実を用意しろ』等がそうだ。と言つても、外出や裸に関しては現在は認められている。

これは、年と共に命令権が拡大したと解釈出来るのだが、命令権の拡大は何時、何処で、誰が決めているのか？

新たな疑問が生じ、それと同時に自らの自由の無さに気付いた時の衝撃を、今でも克明に覚えている。

何不自由無く暮らせている様で、その実、与えられた自由の中でしか動けない籠の鳥……それが俺だ。

勿論、籠の鳥と言つても天竜人だ……凡そ一般人なら許されない事も数多く出来る。

例えば、勉強を嫌がれば即座に終わり、物や奴隸が欲しいとねだれば大抵の物は即日ゲット。

男女問わず裸に成れと命じるのも十歳を境に可能になり、メイドへの性行為の強要も十一歳を境に可能となり、十五歳を境に海軍大将を呼びつけての覇氣修行が可能になつていて。

街に出れば、不敬な者への無礼討ちは何の問題もなく許されてい

る。

そう……『許されている』のだ。

幼い頃から巧みに我が儘放題を叶えつつ、時折叶わない事も有ると刷り込む……こう教育する事で、傍若無人な馬鹿貴族が完成するのである。

俺に前世の記憶、ワンピースを読んだ記憶が無ければ、何の疑問も抱かずあの馬鹿貴族の様に成長した事だろう。

では一体、誰が何の為にこの様な馬鹿げた教育方針を取るのか？

答えは『世界様』と呼ばれる天竜人の当主であり俺の祖父が、跡取りを見定める為だと推察出来る。

直系の子孫に愚民化教育と物を与えて甘やかし、そんな中でも頭角を表す者に全てを与える次代の天竜人の礎とするのだろう。百を超える天竜人と呼ばれる人の全ては、世界様の子であり孫であり、曾孫である。

世界様の血が流れない天竜人は居ないので……つまりだ……あまり考えたくないが、次代の天竜人に選ばれなかつたら……いや、止そう。

推測に推測を重ねた仮定はさておき、馬鹿の多い天竜人について、世界様はハッキリ言って異常だ。

数少ない謁見時の覇気具合を見る限り、世界様は三大将を軽く超える強さを有していると思われる。

強いから偉いのか？

世界様が強いから一族の傍若無人が許されるのか？

多分、そうではない。

如何に強かろうとも所詮は個人。

緻密な作戦を練り上げて逃げ道を塞ぎ、多大な犠牲を払つて波状攻撃を続ければいつかは殺せるだろう。

では、何故偉い？

何故、傍若無人が許される？

傍若無人を許してまで跡目争いをさせる意味は？

そもそも、天竜人とは何なのか？

恐らく聖地マリージョアに居る限り、この答えにはたどり着けない。

俺は、それ等の答えを知りたいが為に、住み慣れた聖地から旅立つ。  
そして、本当の自由を謳歌する為にも、世界様のおわす謁見の間の扉を叩くのだった。

「失礼致します!!」

左右に一匹の龍が描かれた巨大な扉を力を込めて叩いた俺は声を張り上げた。

世界様と謁見するには1にも2にも気合いが重要なのである。只そこに居るだけで、圧倒的な霸王色の霸氣を撒き散らすのが世界様だ。

礼儀作法に拘つていてはお由通りが叶う前に失神してしまう。

『N.O・シックスか……入るが良い……』

扉の向こうから腹の底に響く声がする。

N.O・シックスとは多分俺の事だろう。

一年程前に謁見した時はN.O・サーティーンと呼ばれていたが、この一年で俺の相対評価は幾分か上がったらしい。

そして、この呼称されるN.O・が、天竜人としての現在の序列を現していると推察出来る。

寧ろ、こんな分かりやすい制度があるのに、過半数を越える馬鹿貴族が継承権を競わせていると気付かず自堕落に生きているのが不思議でならない……これが愚民化教育の賜物と言えば賜物だが……いや、止そう……今はそんな事を考へていい場合では無い。

巨大な扉を押して室内に足を踏み入れる。

何本もの円柱で支えられた薄暗くだだつ広い室内には、世界様の霸気が充満している。

世界様が座するは俺の正面、一段高いカーテンの向こう側だ。

「本日はあ！　御願いの議が御座いましてえ！　参上致しましたあつ  
！」

声を張り上げ氣合いを振り絞つて、赤い絨毯の上を一歩ずつ進む。

礼儀作法なんて有ったもんじやないが、いつでもして氣合いを入れないと意識が飛んでしまうのだ。

世界様まで後、三十歩。

一年前は入つて直ぐに片膝着いた事を思えば、俺も随分と成長したらしい。

『海に出るか……許可しよつ』

残り一十歩ほど迄近付いた時、世界様が核心を突く言葉を呴いた。

何故知つている！？

海に出たいだなんて今の今まで口にした事は無い。  
聖地を飛び出すと云つことは、世界様に対しても意を表明するとも受け取られ兼ねないのだ。

俺の権力はあくまでも世界様の許可があつて成立するモノであり、その大元である世界様に面と向かって歯向かう事は自殺行為に近く、そんな素振りは見せてこなかつたハズだ。

こうして世界様の元を訪れたのも、黙つて聖地を去る事のリスクを回避するためだ。

天竜人が聖地から脱走……こんな前代未聞の不祥事を犯せば、三大將の追跡を受けるのは明らかであり、それは流石に面白くない。

俺は、世界様に逆らうのではなく、海に出たいから出るのだ……言葉を選んで慎重に御願いして願いを叶えて頂く……そう考えていたのだが……これは、見聞色の覇気の為せる業なのだろうか？

見聞色は俺にも扱えるが、完全に思考を読み取る様な真似は出来ない。

確かに原作では……空の住人が強力な見聞色を使っていたがダメだなハツキリと思い出せない。

『どうした？ 不服か？』

「滅相も有りません！ 早速の御聞き届けっ！ 有り難く存じます！」

世界様迄、後十歩。

間近に迫つてカーテンを捲つてやろうとも思つていたが、どうやらここまでの一様だ。

その場で片膝を着いた俺は、下を向いて謝意を叫んだ。

『……で、あるか』

「ハツ！！ ではコレにて失礼致します！！」

とにもかくにも俺の願いは叶つたのだ。

余計な事は喋らず、考えず、逃げるが勝ちだらう。

両手を着いて赤い絨毯に額を擦り付ける勢いで深々と頭を下げた。

『左様に急がずとも善かるつ……』

「ですが、これ以上世界様の御手を煩わせ」

『時にシックスよ……貴様は悪魔の実を所望しておつたな?』

「は……? ハイ! 過ぎた願い誠に失礼致しました!!」

『最強とは何ぞや?』

「は……?」

なんだこの世界様は?

コミニ障か?

会話が成立していない。

しかも、最強なんてものは見る人次第でどうとでも変わるアヤフヤなモノだ。

だが、問われたからには何かしらの答えを述べねばマズイだろう。下を向いたままの俺は、世界様の望むであろう答えを必死に探す。

『どうした? 貴様が所望した物であるひつ?』

世界様の言葉に冷や汗が吹き出す。

これは……最強の悪魔の実を望んだ俺への糾弾か!?

実際に欲しかった訳でも、手に入ると思っていた訳でもない。

俺は、天竜人がどの程度の横暴を許されているのか確かめる為に、様々な命令をしてきた……その一環だ。

手に入つたらラッキー位の下心が有つたのは否定しないが、こうやって糾弾されても答えようがない。

なにせ、俺自身が最強の悪魔の実が何で有るか知らないのである。どうする?

ありのままを話すか？

『面を上げよ……』

「ハッ！」

これ以上世界様の言葉に逆らつ様な真似は出来ず、頭を上げた俺は赤い絨毯の上で背筋を伸ばして正座する。

すると、いつの間に置かれたのか、目の前には台座に乗せた悪魔の実が三つ並べられていた。

「コレは!?」

『餓別だ……好きなモノを選ぶが善い』

餓別？

何故だ？

俺は何も答えていない。

やはり、心が読まれているのか？

だとすれば、失礼な事を考えなくて良かつた。

内心でホッと一息ついた俺は、並べられた悪魔の実に目を移す。因みに、悪魔の実を記した大図鑑は何年か前に入手して読破済みだ。

一番左は……ヤニヤミか……確かに最強と言えなくもないが……

「コレは黒ひげが喰うべき実だな。

てか、現時点でここに有つて大丈夫なのか？

海賊王が処刑され大海賊時代と呼ばれる様になつてもひすぐ20

年……時期的にはギリギリか。

未来知識とも言える原作はなるべく壊したく無いのだが、どの道俺が知る原作は一年後に一味が再集結した辺りまでだし、頂上決戦が起ころなくとも割とどうでも良いな。

とりあえず、保留と。

真ん中は……原作未登場のガスガスか……最強種たる自然系だが扱いが難しそう、と言つより火が弱点になるんじゃないのか？

とりあえず、保留と。

一番右も……本編未登場の実か……自然系ですらなく図鑑の説明文も大したことのなかつた超人系の実だが、俺の推測なら……コイツは最強の実に成る可能性を秘めている。

霸気を扱える俺にとって、別に悪魔の実の能力は無くても構わない……一か八か、掛け値なしの最強に賭けて喰つのも悪くない。

決まりだな……元より世界様の用意した実を喰わない選択肢など存在しない。

「お心遣い痛み入ります！ では、こちらの実を頂きます!!」

そう叫んだ俺は右端の実を掴んで天にかざすと、大口開けて食い付いた。

マズい。

だが、時間をかければ逆に喰えそうにもなく、一口、三口でろくに嚥まずに呑み込んだ。

『ほう……ソレを選んだか……面白き男よな』

「お誉めに預かり光栄の至り！ それでは行つて参ります！ 長きに

渡り御世話に成りました！ お祖父様もどうかお元氣で!!

直立の姿勢からの直角のお辞儀を行つた俺は、キビスを返して背を向けた。

世界様と向き合つばかりか、へらぬ嫌疑まで向けられた俺の精神はこれ以上持ちそうもなく、なんとしても謁見を終わらせたい。

だが、黙つて去るワケにはいかない。

子孫をモルモットの様に育てる世界様に思つ所は無くもないが、それでも俺は、この聖地で世界様たるお祖父様から多大なる恩恵を授かつたのは事実だ。

そう……例え反逆者として処断される危険が有つたとしても、御礼と別れの言葉を告げないと人の道に反する事に成る。

我ながら馬鹿げた拘りだが、俺は俺の心の自由に従つて動きたい。それに、これをしつかりとやり遂げれば、ついでに三大将の追跡からも逃れられるし悪くはないハズだ。

『ふ……ふはははは……我をその様に呼ぶか……行くが善い……』  
○・シックス！ 行つて口が望み叶えてみせい！』

「ハツ！」

こうして、命を磨り減らす思いで海へ出る許可と、思いがけず最強の能力（予定）を得た俺は、振り返る事なく出口に向かつて一目散に駆け出した。

何度も言つが、世界様の前では礼儀作法なんでものに拘るよりも、素早く要件を済ませ逃げるが勝ちなのである。

「サー・ティーン……いくつになつた？」

世界様との謁見を済ませ充分に距離を取つた俺が、乱れた息を整えつつ歩いていると、突然背後から男の声で呼び止められた。

「これは……叔父上、それに叔母上。相変わらず仲が宜しいようだ」

振り返つた先には紫髪の丸い頭の男が後ろ手に腕を組み、その後方には口元を紫のスカーフで隠した紫髪の女が立つていた。

大方、何処かで俺の謁見を聞き付けて、探りに来たのだろう。

二人は俺にとつての叔父と叔母……つまり一人とも世界様の子であり、同じ母を持つ兄妹だ。

Ｎｏ・は兄がツーで妹がフォード。

この二人は天竜人継承レースに気付いている口で、お互ひを敵視しているとかいないとか。

まあ、聖地を去る俺には関係の無い話だな。

関係ないと言えば、各々が異性の護衛を引き連れているが、別段話す事もないしじつでもいい相手だ。

「戯れ言を……良いから申すがよい。いくつに成つたのじや？」

「おかげさまでＮｏ・シックスと呼ばれましたよ。叔母上様」

Ｎｏ・は通達される様なモノではなく、謁見の際に呼ぶる事で判明する数字であり、今現在の正確なランキングは世界様しか知らないらしい。

因みに、Ｎｏ・ワンと呼ばれた天竜人は誰もおらず、日々入れ替わるランキングの性質上、同じＮｏ・が被る事もよくある話だ。

「ほう……貴様の様な闘いしか取り柄のない我が儘男がシックスとはな……」

眉のない右目をピクリとさせたノ。ツーが感嘆しつつ嫌味を言つてきた。

「叔父上様も戯れ言がお好きな様で。俺の何処が我が儘ですか」

先ほどの嫌味に対するお返しだらうか、叔父の嫌味に肩を竦めてみせる。

「何つ？」

「そなた、本気で言つておるのか？」

「あり得ない」

「有り得ませんね」

嘘だろ？

叔父、叔母だけでなく、ほとんど言葉を発さない護衛までもが驚いている。

「俺の頼み事など、奴隸を買い漁る事と比すれば可愛いモノではありますか」

「サー＝ティーン……いや、シックスよ。大局を見るが良い……貴様がシャボンティで海賊相手に暴れる為に、どれ程の人間がどれだけの時間費やしているか考えた事は有るか？」

「べ、別にあいつら暇なんだし良いじゃないですか！ 大体、俺が付いてこいと言つてるんじゃないしつ」

「そもそも、奴隸を逃がしたのはシックス、そなたであれど、買わねばならぬは元を正せばそなたのせいといつものじや」

「え？ それは……その……色々と事情が有りまして……奴隸を逃がしたらどうなるかなあ、なんつって」

自らの後頭部を叩き、可憐く言ってみたが、向けられたのは四人の白い目と、紫ババアの「最悪じやな」の咳きだつた。

奴隸解放……別に正義感を振りかざした訳でもなく、これにはつぴきならない事情が有つたのだ。

アレは確か十数年前……前世の記憶を思い出し、天竜人としての暮らしにも慣れ始めた頃だつた。

馬鹿（父）に付き合つて行つたコロシアムで、フィッシュ・シャー・タイガーの名を聞いてしまつたのだ。

俺の記憶が確かなら、あの男こそが奴隸解放の英雄であり、外部から断崖絶壁をよじ登つて聖地で大暴れするハズの男だつたのだ。

しかし、この世界のタイガーは奴隸であり、物理的に外部からの侵入は不可能だつた。タイガーが聖地を襲撃しないと、奴隸は解放されずハンコックも解放されずに原作が変わつてしまつ。

ワンピースの世界に産まれたからには、いつかはルフィ達との交流も果たしたい……そう考える俺には不都合だつたのだ。

それで仕方なく俺がタイガーの脱獄の手引きをしてやり、原作の流れをなんとか護つたと云つわけだ。

霸氣修行の成果を試すべく、身分を隠してシャボンティで暴れまわつているのは確かだが、海兵達の助けを借りた事はない。

付いてこなくていいと言つてゐるのに、ワフワラ集まり遠田に見てるだけの海兵まで俺のせいにされるのは心外だ。

- 16 -

面白い事にこの事件は『断崖絶壁をよじ登つて現れた英雄の仕業』と世間では言わされており、俺的には、原作の修正力はハンパない、と学んだ出来事になる。

そう言えばハンコックはどうなつていいのやら……一応、原作通り七武海に入ったと聞き及んでいるが、少し心配な事もある。原作で描かれなかつたダケかもしれないが、この世界のハンコックはそれなりに酷い目に合つっていた。

奴隸の美少女……これだけ言えば誰でもピンと来るだらうが、そういう事だ。

原作から外れた人間不信に陥つてなければ良いのだが……東の海に行く前に立ち寄つてみるか。

「まあよい……それで、旅立ちはいつになる？」

「変わつた男よな……何の不自由のない聖地を離れ、野蛮な地に向かうのじやからな」

「は？ なんでそれを？」

「貴様の望んだモノを考えてみよ。戦闘力に海楼石を敷き詰めたダイアルで動く小型の動力船」

「どう考へても旅に出よつとしてあるではないか？」

「N.O.・ツーの言葉をN.O.・フォーが捕捉する。

」の一人、マジで仲が良いのかもしない。

「別に良いだろ？ 俺が居なくなればライバルが減つて万々歳だ」

「コレで別れとバレているなら、猫を被る必要はないだろう。口調をぐずし軽口を叩いた俺は、大袈裟に両手を広げてみせた。

「ふつ……違いない」

「愚かな男よな……今少しの辛抱を重ねねば良いものを」

「ほつといてくれ。何をするのも俺の自由だ」

紫ババアの言つことは間違いじゃない。

何を基準に判断しているのか定かでないが、若冠一十歳にしてノ・シックヌの評価を得た俺だ。  
更に10年、20年と励めばノ・ワンとなれるかも知れず、そうなれば次代の世界様となり、知りたいことの全てを知れる。

だが……それでは面白くないのだ。

折角産まれたロマン溢れるワンピースの世界で、他人の敷いたレールの上をひた走る？

そんのは御免だ！

目の前の二人の様に、籠の鳥と知りつつ辛抱を続ける事は俺には無理だ。

「ならば、精々頑張るがよい。これは餞別だ」

兄妹の声が見事にハモリ、揃つて小さな物を差し出した二人は、互いにそっぽを向き合つた。

やはり仲が良いのかもしね。

そんな二人からの餞別を受け取った俺は、別れの言葉を告げると、小型船を預けたシャボンティ諸島へと向かうのだった。

田満に聖地から旅立つた俺は、シャボンディ諸島の片隅でひつそりと営業する、とあるぼったくりバーでビールの入ったグラスを片手にクダを巻いていた。

小型船を預けたレイリーを待つこと一週間。

船が無ければ旅は始まらず、否心なしにマトモな客の来ないぼったくりバーで、不良オヤジの帰りを待っていたのだが、いい加減に飽きが来ているのだ。

「レイリーは何時になつたら帰つてくるんだ？　自由過ぎんだろう？」

「オーザちゃんつたらホント我が儘ねえ。待つ事も楽しいわ……そつは思えない？」

何がどう我が儘なのか分からぬが、『ワール・D・オーザ』これが海に出る際に考えた俺の名だ。

ワールドと名乗れるなら何でも良かつたのだが、シャツキーによる過去にワールドを名乗る大海賊が居たらしく、仕方なく『ワール・D』と名乗ることにした。

世界を旅する、世界様を越える、世界の力を手に入れる……そんな意味をこの名に籠めたつもりだ。

「いや、全然」

客の居ない店内のカウンター席で座る俺は、垂直に立てた手のひらを左右に振つてシャツキーの言葉を否定する。

「あら、そり」

カウンター内で短く咳いた店主のシャツキーは、タバコ片手に手元の新聞に目を落とした。

「大体さあ、なんで行き先を確認しておかないと？ 心配じゃないのか？」

シャツキーとレイリー。この二人の関係はよくわからないモノがある。

俺に分かるのは、恋人同士や愛人関係、そんな言葉で言い表せる様なちゃちな関係ではないって事位だ。

「大丈夫よ。レイさんはオーザちゃんの十倍は強いわ」

「いや、そうじゃなくって、誰と何してるか分かんないだろ？」

「あら？ 私の心配かしら？ オーザちゃんのクセに生意氣ね」

「クセについて何だよ！」

つたぐ、天竜人権限で大搜索網を敷いてやっても良いんだからなつ

シャツキーとレイリーの一人は俺が天竜人であると知っている。それを知りながら態度を変えない一人を気に入っているのは秘密だ。

「天竜人、辞めたんじゃないの？」

立ち上がりて片腕を組んだシャツキーは、少し不思議そうにしている。

る。

「そう思つてたんだけどな？ 意外と叔父上と叔母上も甘い様で……  
これをくれた」

別れの際に受け取つた品を懐から取り出してカウンターに並べ置く。

「これは……純金の懐中時計と永久指針ね？ あら？」

普通と違つ事に気付いたシャックキーは、手にとつておじまじと調べている。

モノは懐中時計と永久指針で合つている。

普通でないのは表面に刻まれた紋章と指針の指し示す方角だ。

「天竜人の紋章に、聖地を差す指針……何時でも帰つてこい、オーザちゃんは天竜人だ……って事かしら？」

シャックキーがカウンターに戻したアイテムを素早く回収して仕舞い込む。

「ああな？ ま、精々使わせてもらひつか

「素直じゃないわね。それで？ オーザちゃんはそれを使つて海に出て、一体何をするのかしら？」

「何つて……自由を謳歌するのに決まつてんだろう？」

「本氣……？」

「ん？ 本氣も本氣だが、なんかマズイのか？」

「呆れでいるのよ。オーザちゃん程自由に生きている人って中々居ないわ」

「そうかあ？ 天竜人は自由に見えて案外窮屈なんだぜ？」

「そんな風に感じる天竜人はオーザちゃんだけよ。でも良いんじやない？ 若い内に海に出て、人に会い、恋をする……そつする事できっと何かが見付かるわ」

「は？ 恋ってなんだよ？ 僕はそんなモノをするために海に出るんじゃないぞ」

恋。

つまりは女でイ」「一肉體關係。  
聖地から出なければ幾らでもやれる事であり、僕にとつては大した  
価値の無いモノだ。

「やつはオーラー ザちゃんだから恋をオススメするのよ」

空になつたグラスにビールを注ぎながら話すシャッキーは、嘘や冗談を言つていてる訳でも無さそうだ。

「恋、ねえ……」

俺の呟きを最後にお互いが口を開けし、ゆつたりとした時間が流れ始める。

と、思つたのも束の間。

『出で』こゝ、レイバー!!』

ドアを蹴り破って馬鹿が現れ、開け放しとなつた入口からたらどうと雑魚も現れて店内を占拠した。

大方、レイリーを撃ち取つて船を上げようともしてゐるのだろうが、馬鹿が多過ぎる。

この1週間だけでも三度目だが……海軍ですら把握していないレイリーの居所を、こんな雑魚が知つていいのは些か解せない。

もしや、このババアと不良オヤジは、わざと情報を流してんじゃないだろな？

「レイさんなら困ないわよ」

俺の向ける白い目にも全く焦つた様子を見せないシャツキーが親切にも事実を告げた。

「隠しだしてしようつてのか!? ババア!!

お?

馬鹿じやなく自殺志願者らしい。

シャツキーがババアなのは紛れもない事実だが、それを口にするのは危険極まりない愚行と言える。

「オーザちゃん? 何か失礼な事を考えてない?」

「いや、全く

「やつ? なつてこね? あのドア幾らだつたかしら?」

「1000万ベリーだな

無論嘘だが、シャツキーに対する感謝料込み込みで、何時もより高

めに吹っ掛けでおつります。

「やうよね……やうほひの事だから弁済金を置いて帰つて頂戴」

俺に一ツコリ微笑んだシャツキーは、そのままの笑顔を馬鹿に向けて金錢を要求している。

極悪だ。

極悪がいるぞ。

「オーザちゃん？」

「はー、すんません」

「なつ!? ふざけへんじやねえ!! こんなボロいドアの何処にそんな価値があるー!」

怒った馬鹿が足元に転がるドアを踏みつけ穴を開けた。

「おー……おっさんスゲエじゃん? 宝樹で出来たドアを貫くたあ大したモンだ」

「ほ、宝樹だと? う、嘘つこへんじやねえ! オレに宝樹は壊せねえ」

おっさんは段々と小声に成りながらも最後まで言い切った。

偉いぞ、おっさん。

「うふ。知つてゐる。おっさんじやあ宝樹を壊せなければレイリーも倒せない。悪い事は言わない……金を置いて帰りな」

「なんだよ？ 黙つて聞いてりゃ テメえ何者だ？」

「恋を求めて世界をさ迷ひ愛の狩人、その名もオーザチャヤ シル

「いや、違う」

シャックキーによる訳の分からぬ勝手な自己紹介を即座に否定しておぐ。

おっさんをいつかせる目的だつたとしても、乗る事は出来ない。

「あら？ 残念ね」

大して残念そうでもないシャックキーは、天井に向けて煙を吐いた。

「へ、テメエラ… フザケテんじゃねえぞお！」

田舎見通り逆上したおっさんが腰のピストルを手にしたかと思つと、

ダンッ!!

流れる様な動きで引き金を弾いた。

只の馬鹿と思っていたがなかなか判つている海賊だつたらしい。殺ると決めたら即座に放つべし……ピストルは脅しの道具じやない。

い。

おっさんの銃口はシャックキーを狙い、ソコから放たれた弾丸が迫る。

素早く腕を伸ばした俺は、その弾丸を…………一本の指先で掴んだ。

だ。

「な、な、なに!?

「あら? 憂いじゃない。そんな事はレイさんだって出来ないわよ?  
?」

「出来るナビヤらないダケだろ?」

「そつかしら?」

「銃弾なんか弾くなり避けるなつすれば良いだけのモンだろ? わざ  
わざ掴み取る意味なんかねーよ」

「なら、その意味の無ことビートでオーザケヤンマヤルのかしひ  
?」

「それは……」

「テメエラ! 無視すんなあ!!」

ダンッダンッダン!!

おっさんが俺に向けて銃弾を発射した。

「オラア!」

拳を武装色で硬化させ迫る弾丸を弾き飛ばす。

弾かれた弾丸が『運の悪い事に』店内の備品を幾つかを破壊した。

「あら? 困つたけやんね? 確かあのグラスも高かつたわ

「500万ベリーだな」

当然、嘘だ。

「大変ね。グラスが三つヒドアの代金……合わせて2500万ベリー  
払って貰うわよ」

「……はほつたくりバーでありシャックキーは追い剥ぎではない。  
商品を注文しない馬鹿には、物品を壊させて法外なお代を請求する  
……それがこの店のルールだ。」

シャックキーがカウンターから店内へと悠然とした足取りで移動する。

「か、か、頭!? ロイツらヤバイですよ」  
「逃げやしじゅー!」

「……」

「帰るのはしつかり弁済してからよ」

出口にて立つシャックキーがニッコリ微笑んでいる。

「ぎゃー」「  
勘弁してくれえ」

そもそも、ピストルを武器にする程度の雑魚が、老いたとは言え真王を捕えるって自信は何処から沸いて出るのだろう?  
貴族だけではなく、世の中馬鹿が多いということとか?

シャックキーにしばかれる雑魚達の叫びをBGM代わりに聞きなが

ら、俺はそんな事を考えるのだった。

ぱつたくりバーは夜を迎えた時に時を刻んでいた。

日中、馬鹿な海賊達が身ぐるみ剥がされ、地面にめり込むところ実に他愛の無い出来事もあつたが、概ね平和な一日だったと言えよう。因みに、馬鹿な海賊達はアレでも一応、3200万の賞金首だったらしい。

賞金額がイコール強さでもないが、アレで3200万ならバギーやクリークにアーロン……「イシラはどんどん弱いんだって心配になる。

元読者としてはワンパンでKOされる東の海の強者の姿は見たくないが、俺に舐めた態度を取れば一発KOは免れまい。  
願わくば穩便に遭遇したいものである。

え？

我慢しろって？

何それ？ 美味しいの？

「シャツキー。今帰った」

馬鹿な妄想をしていると、破壊され開け放しとなつたままの入口に、荷物を肩に下げるマント姿のレイリーが立っていた。

「あら？ レイさん、お帰りなさい」

「遅えよ！ つたぐ、どんだけ待たせるんだ」

漸く現れたレイリーだが、やはり一人の関係はよく分からぬ。

別段、レイリーに悪びれた様子はなく、シャツキーも又、喜ぶでもなく普段通り。

一人でカリカリしている俺が馬鹿みたいだ。

「おや？ 誰かと思えばキミだつたか……私にはキミを待たせた覚えはないのだが、こんな所に一人でどうしたのかね？」

なるほど……確かに、待つているとレイリーに伝えていないし、勝手に待っていた俺が怒るのはお門違いかも知れない。シャツキーの言う俺の我が儘とはこの辺りか？

「ちひ……俺じやねえよ……シャツキーだ」

だが、勝手であつても待つていたのには変わりなく、文句の一つも言つてやらないと収まらない。

「なんとつ！ キミが人の心配をするとはな……シャツキー、明日は悪天候に注意せねばなるまい」

「勿論よ。早速だけど、入口の修理をお願いね」

「うあー！ どういふ意味だ」

隣の席に腰掛けたレイリーにビシッと突っ込みを入れておく。

「すまんな、冗談だ。それよりキミが一人で居るのは、ついに天竜人を辞めたからかね？」

「私は本気よ」と呟き酒の用意を始めたシャツキーはとうあえず無視するとして、「ついに」つて事は海に出ようとしていたのは、レイリーにもバレバレだったのか？

だとすれば、少しまづいな……これから海千山千の相手を向こうに回しての航海が始まるんだ。

もつと上手に立ち回る事を覚えねば成るまい。

それと、レイリーの言う「一人」は周囲に護衛や監視が居ない的な意味があるだろ？

この世界に産まれて以来、常にまとわり付いていた監視と護衛の目が無くなっているのだ……俺の見聞色でも確認していたが、未だ追われる身のレイリーが言つならほほ間違いなく、俺は一人きりだ。

一人きり……なんて清々しい響きだらうか？ 「コレこそが俺の求めた自由への第一歩だ。

とは言え、天竜人を辞める気もない。

「辞めてないさ。俺は、天竜人として海に出る！ と言つても、ワル・D・オーザとして名前を偽るけどな？」

「面白い男だとは思つていたが、まさか、その様な暴挙に出ようとは……全く、畏れ入る。しかし、天竜人であるキミがDとは大胆不敵が過ぎものではないかね？」

「そりゃ？ てか、Dの意味とか知らないし……そういうや、レイリーなら知つているのか？」

「それは、Dの意志についてかね……それとも、天竜人の事かね？」

「オーザちゃんよ？ 両方に決まってるわ」

「はつはつは……そつであつた。オーザ君は片方だけで諦めるような男では無かつたな。欲しいモノは手に入れる、それがキミだつたな」

運ばれたグラスを片手にレイリーは上機嫌だが、俺って2人にどう思われてんだ？

物凄い我が儘野郎に思われてそうで心外だが、これも天竜人としての宿命か。

天竜人イコール我が儘。

これは世界中の者が抱くイメージだから仕方がないのだ。

「で？ 結局レイリーは知ってるのか？」

「無論、知っているとも。Dの意志……天竜人……空白の百年……長い航海の果てに我々は全てを知ったのだ」

「へえ～～」

ロビン辺りが聞けば泣いて喜びそうだな。

あれ？

そういうや、原作のルフィやロビンは聞いたのだろうか？

.....。

ダメだな……思い出せない。

こんな事ならもつと原作を読み込んでおけば良かつたが、まさか自分が転生するだなんて思つてもみなかつたし、細かい所までは覚えてなくて当然か。

「どうする？ 今聞くかね？」

「いや、今はいい……今聞くのは面白味に欠けるつてもんだ。 苦労して航海の許可を獲たのに使わなきゃ損だろ？ グランドライン前

半の海を制覇して、この地に戻ってきた時に聞かせてもらおつ

レイリーの提案は実に魅力的だが、聞いてしまえば俺の旅は始まる前に終わってしまう。

天竜人の謎を解き明かすのも大事だが、自由に旅をして世界を巡り、麦わらの一昧と交流するのも俺の目的の一部となつてこる。

世界の謎はグランドラインを半周した暁に聞く……全てを兼ねるこの辺りが妥当な目標になるだろ？

「まつまつまつまつ……大した自信だが前半の海であつてもグランドラインは甘くないぞ。十分に気を付けたまえ」

「別に甘くは考えてないさ……生きて再びこの地に戻る……コレは決意表明みたいなもんだ」

「そつか……ならば老人の出る幕はあるまい。私はここでオーザ君が為す事を楽しみにしてこよとじよつ」

俺の答えに満足したのか、笑みを浮かべたレイリーはグラスをグイッと飲み干して視線を落とした。

でも、話はまだ終わっていないんだな。

「いや、出る幕はあるが？ 女ヶ島への航路を教えてくれ

「あら？ 早速、女を求めて行くつもり？」

「違うし。大体、自由の欲しい俺が女に縛られてどうするんだよ

「それはオーザちゃんの偏見よ？ 縛らない女も居るし、全てを捧げ

たくなる様なたつた一人の女もいるわ……世界は広いのよ

なるほど……縛らない事で自由が信条のレイリーにとっての唯一無一の存在で有り続ける。

かと言つてシャツキーが無理をしているわけでもなく、縛らない関係の理想を体現しているのがこの二人か。

「ふんっ」

言いたい事は解らなくもないが、鼻で笑つてグラスを飲み干した。

素晴らしい女は世界に匹敵する……こんな意見を耳にした覚えも無くもないが、やはり今の俺には必要ない。

「ふふ……オーザちゃんには難しかったかしら？」

頬杖つくシャツキーは俺の態度を特に気にした風でもなく、タバコに火を付け煙を吐いた。

「良いではないか。オーザ君が何を求めるかはオーザ君の決める事だ。それでキミは、女ヶ島に行って何をするのかね？」

レイリーが值踏みするような視線を俺に向ける。

俺の原作知識が確かなら、十数年前に逃げ出した『ゴルゴン三姉妹』を保護して匿つたのはレイリーであり、女ヶ島への行き方を知つていてと踏んだのだが、思ったよりも過保護らしい。

善からぬ事を企んでいるなら教えない……そんな意志がレイリーの瞳には宿っている。

「そう覗むなつて。ゴルゴン三姉妹がどうなつてゐるのか、会つてこの田で確かめるだけさ」

「そつか……彼女達を救つた天竜人の問題児とはオーザ君、やはりキミの事だつたのか」

見聞色の為せる業か？

それとも単なる察しの良さか、レイリーは俺が問題を引き起こした天竜人だと氣付いた様だ。

てか、天竜人の問題児ってなんだよ！？

俺の扱い酷くね？

いや、そもそも人違いだな。知らないけど、きっとそうだ。

「さすがオーザちゃん。昔からやんちゃ坊主だったのね」

「助けてねえし、やんちゃ坊主でもねえ！」

立ち上がり手を振るい、抗議の意志を表してみたが一人は楽しげに笑うだけだつた。

こんな風に、時にからかわれながら、時に経験を話されながら、楽しい夜は更けてゆく。

それから一夜明け、レイリーから女ヶ島への永久指針を託された俺は、日の出と共にアマゾン・リリーへ向けて小型船に乗り込むのだった。

カームベルトに浮かぶ男子禁制の島、アマゾン・リリー。  
一昔前は幻の島とも言っていた女ヶ島だったが、僅か一日で無事に辿り着く事が出来た。

偉大なる航路を海賊の墓場たらしめているのは、大別すると三つの要因があげられるだろう。

一つは、磁場の乱れや嵐といった自然の脅威。  
一つは、海王類に代表される巨大生物の脅威。  
最後の一つは、人間である海賊による脅威だ。

俺は天竜人の権力をいかんなく發揮して、これらの脅威を脅威で無くす事に成功していた。

自然の脅威は、用意した小型船とエターナルポーズで乗り越え、巨大生物の脅威は、海楼石の船底と幼い頃より海軍本部の連中を呼びつけて、鍛えに鍛えた身体と霸氣でブツ飛ばす。

海賊の脅威は、霸氣と懐中時計に刻まれた天駆ける竜の蹄の紋章で追い払う予定であったが、どちらも使う程の相手に会うことも無くアマゾン・リリーへと辿り着いたので、拍子抜けと言えば拍子抜けだ。

とは言え、順風満帆であつたか？ と聞かれれば答へはノーだ。  
僅か一日に満たない航海であつたが、大きな問題に直面したのである。

それは……。

暇なのだ。

大海原に浮かぶ小さな船の上で、たつた一人で一体何をしろといつ

のか？

あと、飯の用意とかが面倒だ。

早急に誰かを見付けて旅の道連れにすべきだらう。

理想はソコソコ強くて料理が得意、その上で原作に『える影響の少ない人物が望ましい。

まあ、この問題は後でじっくり考えるとして、先ずは間近に迫る問題を片付けるとしよう。

無事にアマゾン・リリーへと辿り着いた迄は良かつたが、少々面倒な事に成りつつある。

島の内部へと通じる川を遡つていると、川幅が狭まつた辺りで左右の岸に蛇みた『』を手にした、多数のビキニ姿の女が現れ行く手を遮られたのだ。

「だからっ！ 海賊女帝に会わせろつづてんだろうが！」

「出来ぬと言つていろー！ 早々に立ち去れ！」

緩やかに流れる川に浮かぶ小型船の船首の上に立つた俺は、島の護衛団の隊長格と思われるビキニ姿の女と押し問答を繰り返している。

天竜人だと名乗ればハンコックに警戒されるのは火を見るより明らかであり、かといってハンコックが隠そうとする十数年前の出来事を明かす訳にもいかず、こうやって面会を頼んでいるのだが、中々上手くいかない。

てか、いい加減面倒だな……死なない程度にブツ飛ばすか？

集まつた百を越えるの中には隊長格の女を筆頭に、原作で見たような人物の姿もあるが、所詮は霸氣無しルフィにあしらわれる程度の連中だ。

俺の敵では無いし、殺さなければ原作に『える影響も最小限になるハズだ。

.....。

よし、ブツ飛ばそ。

それから石壁に作られた中国風の城に行けば、ハンコックに会うと  
いう俺の目的は果たされるハズだ。

「み、皆の者気を付けよ！ ロヤツ、何かしでかす氣だ!! 刃向かつて  
くるなら殺しても構わん！」

俺が戦闘モードに意識を切り替えると、すかさず隊長格が周りの女  
兵に注意を促す檄を飛ばした。

未熟ながらも見聞色の資質を兼ね備えているのかもしれない。

「ま、待ってください。相手は女です。殺さなくても国外追放で良い  
のでは？」

見覚えのある女、確かマーガレットだったかが甘い事を言つて  
いるが、色々かつ根本的に間違えている。

「そこの黄色い髪の女ア！ 僕は男だ!! フザケタ事を抜かしたら  
ブツ飛ばすぞ！」

フザケなくともブツ飛ばしは決定事項だが、普通、間違えるか？  
そりや、身長は如何な天竜人の命令であつても伸ばす事が出来ず、  
170程度の細身の身体だが、肝心の顔は其なりに整つていて、自覚  
があつても、何処からどう見ても男の顔だ。

「レか？」

この長く伸ばして無造作に束ねた薄紫色をした髪のせいか？  
刃物を持たせた人間を背後に立たせたくなかつたのが、まさかこんな形で裏田に出ようとは。

「男だと！」

「きやー男よお！」

「始めて見たの巻きー！」

「『』ひ、我等を謀りおつたか！　皆の者、矢を放て!!」

団長格が振り上げた腕を下ろすと、左右の高みから霸氣を纏つた矢が一斉に放たれた。

「はあ？　謀つてねーしつ、お前等が勝手に間違えたんだろうがつ……オラア！」

下手に避けると船体が傷付く……両手に霸氣を纏わせた俺は、ラッシュを繰り出し迫る矢を叩き落としてゆく。

叩き落とす際は矢尻の先との正面衝突は避けて、横からショートフック気味に叩くのがポイントで、コツさえ掴めば矢を叩き落とすのは簡単だ。

しかし、船の上で闘い続けるのはマズイ。

只の矢尻であっても霸氣を纏わせれば、その攻撃能力は貫くから爆破に変わるので。

万一、流れ矢が船に当たると考えるのも恐ろしい事態を招くだらう……主に、俺の怒り的な意味で。

俺は、隊長格が陣取る川岸に向かつて小型船を蹴り大ジャンプを繰り出した。

「貴様つ……覇氣使いか！」

近距離で俺と対峙した隊長格は、手にする武器を刀から剣に変えて俺を睨み付ける。

「よつ……人が下手に出てやつたのに、やってくれただじやねえか？  
覚悟は出来てんだりな？」

「下手だと！ 貴様がいつ下手に出たといつのだ！」

「海賊女帝に会わせられて頼んだだろ？」「

「そんなモノは下手とも頼みとも言わん！ いや、問答は最早不要！  
貴様が男なら死、有るのみ！」

「気が合ひじやないか？ ロッヂにも話す気はもう無いんだよつ！  
お前等全員、ソシ飛ばして海賊女帝を引き摺り出してやるぜつ！」

「やはつ、狙いは蛇姫様か！ 頭の者、遠慮は無用だ！ かか、れえ

……？」「

「ういつ時は先に頭を潰すべし。

周りに指示を飛ばす隊長格の鳩尾に一撃を食らわせ意識を奪つ。

「隊長！？」

「見えなかつたの巻」

「ああ、次はどうだ？ ブツ飛ばされたくないヤツは、海賊女帝に泣き付く事をオススメするぜ？」

「いつして不適な笑みを浮かべた俺は、降りかかる火の粉を払うべく、『迷惑女達に殴り掛かるのだつた』

「これは一体にやに事じや!?」

「二郎ノ婆あ様!?

「お、お逃げ下せ!…」

八割方倒したところで密林を搔き分けて三頭身のババアが現れた。

女達は九蛇の戦士と呼ばれるだけあって、どうつもコイツも逃げようとはせずに、意識を取り戻しては俺に向かってくる。

手加減も面倒になつてきたし、これで風向きが変われば良いのだが

……。

つてか……ミスったかも知れない。

存在をすっかり忘れていたが、ハンコックの事情を知るであろうこのババアを最初に呼んでいれば、こんな真似をしなくても良かつたんじゃないのか?

次からはもっと慎重に原作知識を思い出して、よりベターな行動を取るべきだな。

「お主、一体にやに者じや? 二郎んじよ用があつてこよアマゾン・リリーに来たこよじや?」

「によによによによ五月蠅いが、若い連中よつは話が出来そつだ。

「やつと話せる奴が来たか……俺の名はオーザ。ワール・ロ・オーザだ。海賊女帝に会つに來た」

散發的に放たれる矢を払い除けながら、現れたニヨン婆の近くへと移動する。

話をするなり、お互に声を張り上げずに済む距離が良いだらう。

「ワール・ロ・オーザ？ ワール・ロ・オーザとな？ 聞かぬ奴じやな。蛇姫に会つてびひすみつもじじや？」

「別に何も？ 会つのが俺の目的だからな」

「にやんと!? 蛇姫に会つ為だけにこれ程によ事をしてかしたと言つによか？」

「はあ？ これ程？ こんなのは当然だろ？ コイツらは武器を手に襲つて來たんだ……殺されなかつただけ有り難く思つんだな」

俺の言葉にニヨン婆が何故か目を見開いて驚き、地に伏す九蛇の戦士の何人かが悔しそうに下唇を噛んでいるが、知つたことではない。弱い奴は全てを奪われ蹂躪される……嫌ならやられたらやり返す……それがこのワンピースの世界だ。

奪われたくなれば、権力でも腕力でも知力でも数の暴力でも、何でも良いから『力』を手に入れ自らを護るしかないのだ。  
奪われたくない俺は、血ヘドを吐きながらも絶対的に信頼出来る力として、戦闘力を手にしたのである。

「にやんと言つ言い草じや！ ジヤが、お主が如何に強く我が儘でも

目的は叶わにゅ。蛇姫は外海に出でるにゅじゅかりな。いくら暴れよつとも、城に乗り込もうとも蛇姫には会えぬにゅじゅ

「マジかよ……」

だつたらなんで「イイツらは馬鹿みたいに襲つてきたんだ?

俺に弱者をいたぶつて悦に入る趣味はない。

ハンコックが居ないなら、完全に骨折り損のくたびれ儲けじやないか。

「ニヨン婆様ー」

ニヨン婆の発言の何が気に入らないのか、満身創痍の隊長格の女は仲間の肩を借りて起き上ると、咎める様にニヨン婆の名を叫んだ。

「よいではございか。どこよ道こいに面する者達ではござ男は止められにゅ。眞実を告げて帰つてくれりゅ もうそれも国を譲る一つによ手じゅ」

「ですがつ、不法に入国した男は死罪! それがこの國の絶対の掟!!

「そんにゃ事を言つても、如何にしてその掟を果たすとこりにゅじゅ? そにょ男は、掟だから従つてくれと言つて従つよつゝ男ではあるまい」

「そ、それは……九蛇の戦士の誇りを掛けて必ずやつ

「はいはい。内輪揉めは後で勝手にやつてくれ。海賊女帝が島に面ないなら好都合だ……俺は其処らの沖合いで九蛇海賊団が帰つて来るのを待つとしよう。邪魔したな

「この場を去ると告げた俺は、川に浮かぶ小型船へと飛び乗つた。

「いや、いやんと!! ま、待つのじやー！」

「二郎婆様、どうしてくれるんですか！ その者は目的を果たさず引き下がる様な男では無いのです！ 拳を交えた私達には判つたのです……例え、死んでもこの男を蛇姫様に呑わせられないつ……それをつけ！」

「男は勝手と聞いていたけど……」

「男は恐いの巻ね」

「は？ 誰が勝手で誰が怖いつてんだ？」

「貴様に決まっている!!」

隊長格の女がビシッと腕を伸ばして俺を指し示すと、意識のある女の全てがウンウンと頷いた。

なるほど……世間と隔絶された女ヶ島に暮らすだけあって、男の勝手のなんたるかを理解していないらしい。

俺が勝手なら他の馬鹿貴族はどうなるつて話だ。

まあ、コイツラが世間知らずでも、俺にこはどうでもいい事だ。死者を出して原作に影響を『えない内にサッサと出航するとしてよ

う。

俺は、動力元となるダイアルを一度、二度と蹴りつけて出航の準備に入る。

ん……？

「この感覚は……？」

「ま、待つよじやー！　お主に勝手をされではここに居る者達はどうにやる!?　護国を果たせにやんだ者は罪に問われ……最悪、死を賜るによじやぞ!!」

川辺に慌てて駆け寄ったニヨン婆が両の拳を握り締め、自分達の都合を力説している。

「そんなの俺が知るかよ。國を護れないのはソイツラが弱いせいでの死を告げるのはお前等の王であり擬だらうがつ。人に責任を擦り付けんな！」

「お、お主には人によ心がにやいのか!?」

「さあ？　どっちにしてもアンタラにとつては手遅れで、俺にとっての目的達成は直ぐソコだ」

下流に浮かぶ巨大な船を指し示す。

ゆつくりと川を遡る海賊船の帆には、九匹の蛇をイメージしたシンボルマークが描かれている。

そして、船を引く巨大な蛇の様な生物の頭の上には、長い黒髪を風に靡かせた女性の姿が見てとれる。

「蛇姫様！」

「蛇姫様！」

「蛇姫様あ」

徐々に近付く九蛇の船に気づいた女達は、目を輝かせて両手を合わせて握り締め、一斉に蛇姫の名を連呼する。

どうやら、あの『コト広女』が王下七武海の一角、海賊女帝、ボア・ハンコックで間違いないらしい。

確かに、原作通りの整った綺麗な顔立ちをしているがソレだけだな……能面を思わせる冷酷そうな表情には何の魅力も感じない。

馬鹿みたいに騒ぐ女達は、ハンコックの放つ霸氣とメロメロの実の力で魅力されているのだろう。

ともあれ、容姿や周りの反応に関しては、ほぼ原作通りだ。残る問題は性格だが……兎に角、我が儘だったら原作通り、なのか？

「わらわの出迎えもせず、かよつな場所で何をしているのじや？」

俺の小型船の横を素通りしたハンコックは、隊長格の近くで船を停泊させると詰問を開始した。

言葉の一つも聞き逃すまいと小型船を操った俺は、巨大船と並走するように川を遡る。

「ハッ！ 不法に侵入した者を捕らえる為に、この場で戦闘を行つておつました」

「侵入者じやと？ ……そこの男か？」

蛇の頭の上から、俺を『コト』でも見るよつた視線で文字通り見下ろしたハンコックは、直ぐに興味を無くしたかの様に隊長格に視線を戻した。

「ハッ！ その者、中々手強く、又、蛇姫様の御帰還はもう暫く後かと思つ」

『メロメロ・メロウー』

隊長格の発言が終わらぬ内に、ハンコックが両手を前に突き出して指でハートを形取つたと思うと、ハート型の何かが発射され、隊長格とその周りの数名を石化させる。

「言い訳など聞きとうない……わらわの出迎えと侵入者の駆除、どちらが大事かも判らぬとはな」

「侵入者の駆除に決まつてんだろがっ！　！」の「テ」は広女あ！！

あまりに愚かなハンコックの暴挙に、俺は蛇を見上げて思わず叫ぶ。

隊長格は俺に敵いこそしなかつたが、ハンコックの為に鬪つたのだ。

それをハンコックが傷付けるのは、自らを傷付けるのに等しく、その様な愚かな行動は天竜人だつてやりはしない。

自らを貴人で尊き者であると自認する天竜人にとって、海軍や城は自らを護る矛であり盾なのだ……それを虜げるのは自らの否定に繋がりタブーとされているのだ。

つまり、海軍を頻繁に呼び付けた俺は、天竜人の中に在つて異質な存在だと言えるが、それでも無意味に呼んだ事はない。

「な、なんたる暴言！」

「神をも恐れにゆとはこによ事じや」

「姉様、お気をしつかり」

俺の事実を指摘する発言に一瞬固まつた女達であったが、気を取り直すとある者は驚き、ある者は天を仰ぎ、又ある者は崩れそうになるハンコックを抱き支えた。

「貴様つ……わらわに向かつてその様な暴言が赦されるとゆつておるのか！」

正氣を何とか保ったハンコックが鬼の形相で、震える声を絞り出す。

さつき迄の能面よりも余程美しく見えるのは俺の氣のせいか？

「はあ？ 僕は何を言つても赦されるんだよ！ 何故なら僕は  
…………偉いからだ！！」

何故偉いのか判らないが、偉いのは事実だ。

固まる女達をよそに、腕を組んだ僕は高笑いを上げ続ける。

「や、最悪じゃ……アレではまるで、蛇姫が一人ではにゃいか!?」

笑う俺と、それを睨み続けるハンコックに向けて、誰かがこんな事を呟くのだった。

「はつーはつはつはつ…………ハツ!?」

やつちました……。

ハンコックの性格に差異があるかを確認するだけのつもりが、つい余計な事を言つてしまつた。

原作に居なかつた俺がハンコックと変に接触すればどんな事態を招くか想像もつかないので……不思議な事に周りの女達が固まつているし、口の隙にとんずらするのが得策か?

.....。

よし、逃げよつ。

そうと決まれば善は急げ、小型船の舵を握り九蛇の船を追い越した俺は、九蛇の船の船首の前でロターン行動に入る。

「待つのじやー！」

蛇の頭を器用にもたげさせて、近くにやつてきたハンコックに呼び止められるが知つた事ではない。

「嫌だ。用は済んだし俺はもう行ぐぜ」

ハンコックに一警だけくれた俺は、出航の準備に取り掛かる。

「な、なるたる無礼! そなたの用が済んでも、妾の用は済んでおらぬわ! そこになあるが良い! 妾自ら死を『お』えてくれるわ!」

何が無礼か解らないが、ハンコックは片手を腰に当て仰け反る様な姿勢で俺を指差している。

原作通り偉そうなのは良いとして、原作よりも怒りっぽいのは気のせいだろうか？

「死、とか要らねえし。

大体なあ、俺に構うより石にした連中を元に戻してやれよ？ アイツラは国の為に、お前の為に命を賭けて俺と戦ったんだぞ？ 一心無く仕えてくれる人間は何にも勝る得難い宝つて知らないのか？」

「よ、よくもぬけぬけと……元を正せば男よ、そなたがこの島に現れたのが原因であるつー。何の企みがあつて、ビリやつてこの島に来たか申すが良い！」

わなわなと震えるハンコックだが……この感じは怒りではなく、まだ少女だった頃のハンコックと同じ怯えによるモノに思える。

幻の島と呼ばれた自身の安住の地である島に、天竜人である俺が一人で容易く現れた……この事実が彼女にえもいわれぬ恐怖を与えているのだろう。

ハンコックの冷酷な面と偉そつな態度は、怯えを隠す為の仮面であり鎧であるといふことか……。

あの日、

あの夜、

あの場所で、

俺は確かにハンコックと出会つた……いや、止そう……俺にとつても気分の良い思い出ではない。

ま、あの出会いだ……彼女が俺を騒ぎの元凶と知らず、単なる天竜人と認識しているならそれはそれで良いだろう……ハンコックが俺

に頑なな態度でも勘弁してやるか。

「ちつ……俺はコレを頼りにお前に会いに来ただけだ……別に何も企  
んでねえよ」

ハンコックを安心させてやるために、レイリーから預かった永久指  
針を投げ渡す。

「い、これはっ……」

永久指針を見事にキャッチしたハンコックは、指針を見るなり言葉  
を失った。

そして、

『スレイブ・アロー』

何の躊躇いもなく唐突に、ピンクのハート型の何かを作ったかと思  
うと、ソレを引っ張り訳の解らない矢を何本も放ってきたのだった。

「はあ!? 何しやがる!? オラオラオラあ!!

迫るピンクの矢を叩き落とすが、元より俺を狙っていないのか範囲  
が広い。

俺が得た能力は、意識を加速させる事で精密な動きを可能とする類  
のモノであり、スピードやパワーが上がるといったモノではない。  
まあ、反応速度が劇的に上がっているから、スピードは多少上がっ  
ていると言えなくもないが、それでも肉体に備わる能力を越える事は  
ないだろう。

そんな訳で俺を狙わない同時多発的な広範囲攻撃は捌き切れず、敢えなく船への被弾を許す事となる。

ピンクの矢が刺さつた辺りを中心に船が石化し、船体が僅かに傾いた。

よし、ブツ飛ばそう。

この手の能力は意識を奪えば元に戻ると相場は決まっているのだ。

え？

原作？ 勘弁？

なにそれ？

ここは現実で甘くない。

俺に舐めた態度で危害を加えてくるのなら、例え同情すべき原作キャラでも容赦はしない、ってか容赦するべきではないだろう。原作保存は動き易くなる為の方針論の一つに過ぎず、原作に拘り過ぎて動きを阻害されでは本末転倒となる。

沈みかける小型船を蹴った俺は、九蛇の船へと飛び移る。

「人が友好的にしてやつたのに、やってくれたじゃねえか？ ブツ飛ばしてやるから掛かってきな！」

怒氣を含んだ霸王色の霸氣を撒き散らして甲板に躍り出ると、船上にいる女が意識を失いバタバタと倒れていく。

ん？

九蛇の戦士の中でもエリートのハズがこの程度で倒れるのか？

「ゆ、友好的！」

「そ、それより姉様に一体何を渡した!?」

意識を保った女、ソニックゴールドとマリーだったかが、巨大な頭を押さえながら俺に話し掛けってきた。

ハンコックと似ているかと問われれば微妙だが、三姉妹が似ていなのは原作通りだし問題あるまい。

「おお、お前らか？ 立派に成長した様で何よりだ

「なに？ 立派に成長？」

「何処かで、会った？」

「なんだあ？ お前ら俺が誰か判つてないのか？」

だつたら何でハンコックはあんなに怯え、キレイなんだ？

「黙れっ！ この卑怯者めが！ 一人から離れよ!!」

蛇姉妹に気を取られていると、背後から飛んできたハンコックのソバットが俺の後頭部に迫る。

「遅いっ！ オラあ!!」

能力を発動させて振り返った俺は、的確にハンコックの長い足をガードすると反撃の拳を繰り出した。

「な、何故じゃ!? 何故石化せぬ!?

覇氣で悪魔の力を防いでいるだけなのに、ハンコックも能力にかま

けた馬鹿なのか？

だが、体術は中々のモノだ。

顎を撃ち抜くハズの一撃はハンコックのクロスアームにガードされ、後方に吹き飛ぶこともなく、甲板の上で数メートル後退つただけで踏ん張られた。

「うう……良い反応してんじゃねーか？　だがなあ？　イキなり蹴り掛かるのはじんな」見だ？」

「黙れと云つておるつー。よくも、わらわの恩人であるレイリーに預けた品を盗んでくれおつたな！」

「はあ？　なんでそつなる？」

「惚けるでないわ！　そなたが投げ寄越したこの永久指針が何よりの証……あの強く優しいレイリーがそなたゴトキに遅れを取ろうハズがなかるうー。ならば、答は明白ー。」

「こ」で一呼吸置いたハンコックは、片手を腰に当てビシッと俺を指差し仰け反った。

「そなたが賤しくもレイリー宅に忍び込み、盗み出したのじゃ!!」

「黙れっ！　『テコ女!!』

ヘボ探偵も真っ青の馬鹿推理を披露するハンコックに飛び掛かつた俺は、仰け反る顔を田掛けて撃ち下ろしの右を振り下ろす。

攻撃を受けたハンコックがバランスを崩し、甲板の上に首を立てて倒れ込んだ。

「あ、姉様を……」

「蛇姫様のお顔を……」

「殴ったあ！??」

周りの女達が頬に手を当て叫んでいるが、残念ながら俺のチョッピングライトはすでにどこかでガードされている。

その証拠に、ハンコックは何事もなかつたかの様に起き上がった。「誰が空き巣の様な真似をするかつ！　俺は欲しいモノは『力』を使って手に入れるんだ!!」

「怒るとこソノ『お！?』

「あの男、最悪よおー！」

『メロメロ・メロウ』

起き上がったハンコックは完全に表情の消えたジト目で石化光線を放つた。

「そんなもんが効くか！」

避けるまでもなく腕を組んだ俺の身体を、変な光線がすり抜けてゆく。

「その様じゃな……ならば、蹴り殺し、切り刻んで魚のエサにしてくれよ！」

「上等っ！　能力にかまけた馬鹿が近接戦闘で俺に敵うとも思つてんのか？」

聞く耳持たない。

そんな雰囲気を漂わせるハンコックに口で説明するのも面倒だ。

それに、王下七武海の力をこの身で確かめておくのも悪くないだろ  
う。

「……して俺は、海賊女帝、ボア・ハンコックと殴り合つ事になるの  
だった。

「ま、まさか、七武海程度が殴り合いで俺と互角に渡り合つとはな  
……」

能力を使う度に体力が消耗する……こんな設定は原作には無かつ  
たぞ？

そうとは知らずに最初から能力を使いまくった俺は、仕止めきれな  
いまま息切れを起こし、闘いは長期戦となってしまった。

くそつ……能力を手に入れて浮かれた馬鹿は俺だったのか？

こんな、能力無しのハンコックに手こする様じゃこの先が思いやら  
れるぜ。

「ど、何処までも偉そうな男じゃが、最後に勝つのは妾に決まつてお  
る」

クロスカウンターで互いの顔面にパンチと蹴りをめり込ませた俺とハンコックは、満身創痍に成りながらも強気の姿勢を崩さない。

互いの霸氣もとつゝの昔に底を尽き、俺とハンコックの闘いは単なる殴り合いの様相を呈していた。

身長によるリーチの差からこのまま行けばハンコックがやや有利……だが俺にはまだ悪魔の能力が残されている。

体力の消耗具合から考えて使えるのは後一度で限界だろ？……ならば、その一度に全てを掛けてラッショウを叩き込んでやる！

「ええ加減にせにゅか！」

最後の勝負を掛けようとしたところで、いつの間にか船上にやって来ていた二コン婆にゲンコツを落とされた。

自身の身長以上に飛び上がり、俺とハンコックの一人を同時に殴り付けるとか、大した妖怪っぷりとしか言えないぞ。

「痛てて……ババア、何しやがる!? お前も敵ならブッ飛ばすぞ！」

「邪魔をするでないわ！ 全く……何処から来たのじゃ？ いつもいつも鬱陶しい女よ」

「二人とも見上げたもんじゃが、ワシによ攻撃でフラツキナリやから、最早闘える身体ではあるみやい？ こいつは引き分けでビリジヤ？」

「あん？ 僕の本気はこれからだつづーの」

「そのチビ男など、妾がこれから見事に倒してみせよつざー。」

むかちーん。

「誰がチビだ？」Jの「広女めつ。お前なんか俺が能力を使いこなせりや瞬殺の雑魚武海のクセにっ！」

「Jハ、一度ならず二度まで……！ そなた、妾の魅力がコンプレックスなチビ男で良かつたの？ メロメロの能力が通じたなら、そなたなど一瞬で石になつておつたわ」

「あん？ 続きやんのか？」Jの、「カ女つ」

「何時でも掛かつてくるがよい。この未熟男つ」

俺とハンコックはテ口を突き合わせ、互いにメンチを切つて火花を散らす。

「えーつー！ 一人とも子供か!! 止めこと言つておらう！」 そ  
みょそみょお主、何故蛇姫と鬪つておりゅ「よじや？」

「当然つ、Jのテ女に俺の方が強いつて解らせてやる為だ！」

「馬鹿はお主じや！ 自分で言つておつた目的を思い出してもよ！」

「えーーーと……ハンコックに会つ……だつたな」

おかしい。

確かに俺の目的はハンコックに会つことだった。  
それが何故こんな事になつている？

さては、メロメロの実の力で魅了された結果か？

つて、違つか。

「相も変わらず、いやいやと口戻い女よな。久しぶりに楽しんでおったのじゃ……男よ、やなたもやうであらう。」ヨン婆は黙つておれ……我等の邪魔をするでない！」

顔を腫らし乱れた髪をかきあげたハンコックは、途中俺に同意を求めてきたが、正直、全然楽しき。

「黙りませぬや……蛇姫よ、時に苦悶も嘗つが、ワシはそなたが我が儘であつても構わぬと思つておるのじゃ。我が儘姫の元、国民が纏まりゅ……そんな国が世界に一つへりこ有つても良からう。じやが！ そなたの我が儘を許しても、恩を仇で返す様な真似は許せにゅ！」

!!

「恩じやと、何を申しておる？ 姫は今日の今日まで、コヤツの様な無礼な男は見たことも念つた事もないわ」

ハンコックはやはり俺を知らなこと無い……となれば彼女の畏れの対象は全ての男になる、のか？

だとすれば、我が同族との取り巻き達は、なんとも罪で愚かな事をしているとしか言えまい。

度を越えた畏れは些細な事で反乱を招く。

それは、あの日の脱走劇からも明らかだ……俺がタイガーの牢の鍵を開け、首輪を解錠しただけで後は雪崩の様に脱走劇は広がつただ。

馬鹿貴族達は、どうして人を虐げる危険にも気付かず、あんな事が平氣で出来るのだろ？

あの日、ハンコックを探して向かった先で俺が見た光景は……。

「姉様……覚えてませんか？あの日、あの時、」

「止めてー。こんな人目につけた場所で話す事じゃない！」

俺の思考とリンクするようにあの日の事を話さうとする緑髪の妹を制止する。

「心配は無用じや。」の船上にみ者は「」この五人以外は皆意識を失になつてゐる。お主と蛇姫によく闘いによく覇気に充てられて「」

「いや、その歳、その面で語尾が『いや』とかどうかと思つたぞ」

「お主は真面目に話しても出来にゆきか!? 少し黙つて話を聞いておれ」

「はあ？ なんで俺がお前らの都合に従わなきゃいけないんだ？」

てか、こんな胸糞の悪い話をする必要がどーにある?

どうしても思ひ出話しがしたいなら、俺の居なことじりで勝手にやつてくれ。

「そなた、何を隠уюとしておる?」

取り出したハンカチで顔を拭いたハンコックは、腫れの引いた綺麗な顔で俺を見ている。

いくら何でも早すぎるが、ワンピース世界ならコレへりこは当然か。

「別に隠そうとはしてないぞ？ 待つてるのが面倒なだけだ」

「そなたといつ野は……良からぬ。待って話を聞くなら、そなたの船の石化を解いてやる。これでどうじゃ？」

「何を偉そうに……元はと言えばお前が石化させたんだから直すのは当然だ。まあ、その条件を飲んでやるから手短に頼むぜ」

あの船こそが俺の旅の生命線……小型船が直るなら少し位我慢をするのも良いだろ。

こうして、甲板の上に大の字になつて寝転がつた俺をよそに、三姉妹とニヨン婆は時折眉間にシワを寄せながら、あの日の事を話すのだった。

はあ……やっぱこうなるよなあ……ぐだらねえぜ……嫌な過去を思い出して嫌な気分になる。

一体誰トク!? つて感じだし、もし、この光景を見ている奴が居たのなら、これより先は見ない事をオススメするぜ。

「妾達を『助けた』子供……その子供が成長したのがそなた。コレで間違いないのじやな?」

過去を思い出して、今日の出来事を照らし合わせ、色々な推測を重ねて一つの仮定に辿り着いたハンコックは、大の子に寝る俺を見下ろす様に問つてくる。

「残念、外れだ……俺にお前らを善意や同情で『助けた』覚えはない……だが、汚いモノをぶら下げて、お前に襲い掛かるうとしたクズを後ろから刺し殺し、室内で海楼石の檻に入れられていた2人を逃がしたのは俺か？ そう聞かれればイエスと答えてやる」

太陽を背負うハンコックの眩しい顔を見上げながら事実を教えた俺は、ゴロンと寝返りうつて横を向く。

その途端、膝から崩れ落ちたハンコックは所謂、女座りに座り込み両手で顔を覆い隠すと嗚咽を上げて泣き出した。

「姉様つー！」

姉妹一人はハンコックの背後に駆け寄ると肩を抱くように寄り添つた。

泣き声こそ上げないものの、一人の大きな瞳にも涙が浮かんでいる。

「この雰囲気、どうすんだよ？」

「お主……天竜人を殺めておきにやがら、ようも今まで生きておれたにや？ いや、よくぞ生きていてくれた……言葉を失った三人によ代わりに例を言つわい……この通りじや」

横を向いた視線の先に現れたニヨン婆は、三頭身でありながら綺麗な土下座を披露した。

「また語尾に『にや』を使いやがつて……さてはババア、真面目に話す気が無いだろ？」

むぐりと上半身を起こして笑みを浮かべた俺は、胡座をかけてニヨン婆へと向き直す。

「お主といつ男は……いや、それもこれも辛い過去を隠す強がりに  
裏返しかにゃ？」と、蛇姫によう似とするわい

「はあ？ 辛い過去～？」

「このババアは何を言い出すんだ？」

そりや修行の日々は辛く厳しいモノだったが、あの日々が有つたら  
俺は海に出れたんだ。

「妾達の前では強がらずとも良い……そなたも妾達と同じ（奴隸）であ  
るう。あの場に現れたのが何よりの証……幼いそなたに人を殺めさせたバカリでなく、知らぬ事とは言えそなたを殺そうと……」

背後から抱き付いてきたハンコックの細い腕が俺の胸の辺りで交  
差する。

「ん？ まあ、俺も籠の鳥（天竜人）だつたし似たようなもんか？ け  
どな？ 俺は人を殺めてない！ 俺が殺したのは……クズだ！！ ア  
イツラこそが俺の敵……いつか聖地に戻った瞬には、一匹残らず見つ  
け出して根絶やしにしてやるぜ」

本来なら天竜人は奴隸を必要としない。

放つておいても世界中の国が貴族の娘を、従順なメイドとして送り  
込んでくるのだ。

反骨心を胸に秘める危険な奴隸を使う必要がないのだ……つまり、  
ハンコック達を買ったのは馬鹿な同族であっても、虧げ続けたのはそ  
の取り巻きだ。

天竜人の権力を傘に着て、影でやりたい放題を続けるクズ……俺の  
威光を傘に着るクズは始末してやつたが、他の同族の取り巻き迄は調  
べ切れていない。

クズであつても知恵はある……尻尾を掴むには中々に骨が折れるのだ。

回されたハンコックの細腕を撫でながら俺は田標の一つを表明する。

しかしまあ、この細い腕で俺と互角に殴り合つとかどうなつてんだ！？

「はああん！？」

奇声を発してハンコックが崩れ落ちた。

「姉様！？」

姉妹二人が倒れたハンコックを揺り動かす。

てが、コイシラさつきから姉様しか言つてないな。

「ゴッホン……して、お主はここの後どつするによじや？ 如何に強かるつと、今すぐ聖地に乗り込むには実力が足りにゅによではないか？」

痛いところを突いてくるババアだな……ハンコックと互角程度の実力じゃ三大将には敵わない。

だが、俺が天竜人と氣付いても、三大将と鬭つ」となく普通に帰れる天竜人とは如何な年の功でも氣付くまい。

「そ、そつ急くでないわ……妾はここの御方にまだ詫びて許しを請うておらぬ。妾はそなたから受けた恩を一日足りとて忘れた事は無い！」

正気に戻ったハンコックの俺への呼び名が『御方』になっている。

なるほど……如何な七武海でも天竜人と知ったなら、態度が変わると云うことか。

これは、面白くないな……安易に身分を明かすのは控えるとしよう。

「ちつ……馬鹿かお前？ その広い口に脳は詰まつてないのか？」

ハンコックの手口に軽く手口ピンを入れてやる。

「は、はい？」

「嫌な事なんかサッサと忘れて気にすんな。俺に許しを請う？ 何の事か解らねえが、俺に許しを請うなら全てを許そう……何故なら俺は、偉いからだ!!」

立ち上がりつてそう叫んだ俺は、ポカンと口を開けて呆れる女達の視線を他所に、腕を組んで高笑いをあげるのだった。

それから、船を石化を解いてもらつた俺は、一人の九蛇の戦士を旅の道連れに迎え入れ、東の海を目指してアマゾン・リリーを後にするのだった。

聖地への指針を頼りに、東を目指して小型船を走らせるコト一週間。

永久指針が聖地を指示するのだから、真逆に進めばリバースマウンテンへ辿り着くというコトに他ならない。

今現在、どの辺りを航海しているのか判らなくとも東に進んでいるのは確実で、そのうち赤い大陸にぶつかるだろ？

問題であった『暇』も、女ヶ島で一人の乗組員を迎えた事で、ある程度解消出来ている。

当初、ハンコックは九蛇の船で送るとはざき、それが駄目なら自分が船に乗り込むと言つてきかず、ひと悶着の掛け句、隊長格であったキキョウに『九蛇の戦士としてこの御方を護衛せよ！』と命令を下したのである。

嫌そうなキキョウを無理矢理連れ回せば危険になるが、皇帝直々の命令となれば俺が無理強いしている訳ではなくなり、裏切られる心配がかなり低くなるので受け入れた次第である。

堅物のキキョウは話相手としては微妙で、料理もさほど得意でないが、及第点の強さを備え『悪魔の実の能力者でない』のがポイントだ。俺が海に落ちた場合の救出はキキョウに全てが懸かっているのである。

つまり、万が一に備えてキキョウとの信頼関係を築くのが以下の課題となってくる。

そんな訳で俺は、今日もキキョウに話し掛ける。

「暇だなあ……キキョウさんや……飯はまだかい？」

前方を横切る帆船を見付けた俺は、船縁に顎を乗せたまま振り返ら

「先程食べただではないかフール殿！ 大体その呼び方は何なのだ

!?」

「そう怒んなつて。ちょっと呼んだだけじゃねえか？」

振り返った俺は、船縁を背もたれに座りキキョウを見上げた。

キキョウは航海に出でているところの上、首に蛇を巻き付けてキーリ姿にマント、要するにアマゾン・コピーの頃と全く同じ格好をしているのだが、この狭い船上でその露出はどうかと思ひや。俺しか居ないから良いようなモノの、この航海中には世の男の常識を学んでもらいたいモノである。

「貴様はつ……普通に呼べんのかつ」

信頼を築こうと何かにつけて話し掛けではいるが、キキョウの反応は大体がこの調子だ。立場の違いによる不幸な事故でブツ飛ばしたのを根に持たれていいるのかもしれない。

「キキョウって服装の割にはお堅い奴だよな？ もつと気楽に出来ないのか？」

「出来ぬつ……私は貴様の護衛としてここに居るのだ！ それと、この服は九蛇の戦士としてのたしなみだ！ 馬鹿にゐるなつ」

「馬鹿にはしてないし、お前がどんな格好をするのもお前の自由だ。けどな？ こんな小さな船でそんな格好をしてこるから俺を誘つてんのかと思つてな？ 俺なりにいつでも良いぞ」

小さな船と言つても長期航海を前提に作られた船であり、情事を行える程度の船室は備えている。

船の形状としては、ヨサクとジヨニーが所有する船に近いハズだ。

「……なつ!?」

年甲斐もなく顔を赤らめたキキョウが絶句する。  
男との接点が無かつた生活を送つていた割に、この手の言葉の意味  
は解るらしく。

「冗談だつて。俺は後腐れの生じる相手とはしない主義だから安心し  
な。それより、あの船の帆に描かれた紋章に見覚え無いか？」

「し、知らぬ……あ、生憎と外海に出た事が無かつたんでな」

「ああ、そういうやうつか……あの紋章、昨日も見ただろ？ アレは俺の  
記憶が確かならアラバスター王国の紋章だ」

起き上がつた俺は、キキョウの横に並び立ち帆船に向けて指を指  
す。

「アラバスター……王国、だと？」

「ん？ それも知らないのか？ ま、知らないなら仕方ないけどよ？  
嫌々でも世界を旅するなら、色々と見て学んで楽しんだ方が得だと  
思わないか？」

「そ、う、だな……善処しよう」

組んだ腕を崩して顎を触りながらキキョウは僅かに考え、そう呟いた。

「だから堅いって。まあ、いいや……それで、あの船の行き先には多分アラバスター王國がある……ってな訳でアラバスターに行こうぜー。」

「何故そつなる? 貴様は東の海に行くのでは無いのか!?

「東の海には行くぞ。だがなあ? 寄り道こそが旅の醍醐味! ついでに、食料の補充をしておくか?」

「む……そういう事情ならば……。出来れば『ついで』の方を理由としてもらいたいモノだな」

しきりして俺は呆れるキキョウを説き伏せて、アラバスターへと船首を向けるのだった。

やつて来ました『夢の町』 レインベース。

キキョウには告げなかつたが、ここに来たのは理由がある。

まずは時間軸の確認。

クロコダイルが健在でアラバスターの内乱が起つていなければ、それだけでルフィ達がこの地を訪れていないのは確定する。そして、アラバスターはキナ臭いながらも内乱は起つていない。

次に、クロコダイルとニーハ・ロビンに会うのも目的の一つだ。

クロコダイルは大人気漫画における、不人気キャラの一人であるが、俺はそろは思わない。コートピア作戦が成功していれば、クロコダイルは革命を成し遂げた偉大な王となつたのだ。

産まれながらにして王は王……産まれだけで全てが決する王国制度と、その上に君臨する天竜人。

クロコダイルの計画が悪であるとするならば、誰も新たな王とは成れず、知らず知らずの内に世界は天竜人を認めていると謂うことになる。

コレに真っ向から異を唱え反抗を起こすのがクロコダイルであり、出来れば会つて話がしたい。

まあ『出来れば』なので会えなくとも構わないし、どうせ失敗する計画に協力する気も更々無い。

他にキキョウの服を買つたり、上手い飯をくつたりもしたが、なんと言つても本命の目的が一番重要だ。

本命の目的はズバリ、金稼ぎである。  
長きに渡る金を持たない天竜人の暮らしのせいで失念していたが、旅をするには金がいる。

その金を手つ取り早く稼ぐには、なんといつてもギャンブルだ。適当に賞金首を狩つても良いのだが、派手に狩ると何処でどう転んで原作に影響を与えるか解つたもんじやないので控えていい。

原作に拘り過ぎる気もないが、進んでぶつ壊す気もないのである。

そんな訳で俺は今、レインベースにあるカジノで見聞色の霸氣を武器にカードゲームを楽しんでいる。

「ストレートだ……俺の勝ちだな？」

手札をテーブルに広げて見せた俺は、積み上げられたチップの山を両手で手元に引き寄せる。

手札の都合で降りる事があつても、相手の手札も何となく判り、まさに連戦連勝……ウハウハの丸儲けである。

「わ、ワール殿……か、勝ちが過ぎるので有りませんか？」

ジープシー服に身を包んだキキョウが、背後で訳の分からぬ事を言つてゐる。

「あん？ 勝つて何が悪いんだよ？ てか、何で敬語？」

「で、ですが、周りの田とこづものもアリマス……み、見てください、あの怨嗟に歪む顔を！」

なるほど……向けられる人の敵意の視線にビビッてゐるのか。  
解らぬくもないが、こんなモノでビビッていたら天竜人はやつてられない。

「ああ、自分で賭けて自分で負けておきながら、負ければ人のせいにする馬鹿共か……そんな負け犬は気にするな。それより、次の相手はどういつだ？ 」このチップの山を奪つてやううつて強者は居ねえのか？」

先ほどの勝利で俺の対面の席は空席となつてゐる。

次なる挑戦者と言ひ名のカモを求めて、あいびやかな店内をぐるつと見回す。

しかし、どいつもコイツも俺と視線が合ひつと田と田を反らしやがる。

「……相手が居ないなら仕方ない。

「俺が相手をしてやう！」

「こじらが潮時か？』

そう思つた時、背後となつた対面席からふてぶてしい男の声がした。

「あれ？ クロコダイル……？」

振り向けば対面席にクロコダイルが座つていた。

……。

い、いや、計画通り！

カジノで荒稼ぎして騒ぎを起しそと、オーナーであるクロコダイルが現れる……まさに、予定通り！

葉巻をくわえてふてぶてしく椅子に腰掛けるクロコダイルが、このオーナーだと忘れていたとかでは断じてない。

「ほう……加減を知らねえ馬鹿でも俺の事は知つている様だな……』

「誰が馬鹿だ！ 埋めるぞ、こいつ鰐野郎!!』

クロコダイルの登場に静まり返つた店内だったが、俺のこの発言を切つ掛けに闇を切つた様な勢いで客が退出していった。

慌てながらも殆どの客がチップをしつかり回収していったのは流石である。

ガランとなつた店内に残されたのは、俺とキキョウにクロコダイルとティーラー役の顔面蒼白の男。

そして、向かいにあるカウンターに背を向けて座る女だけだ。

「クククク……青一才が……イカサマの種は見闇色か……使える割にやる」とのセリフ野郎だ

逃げた客の反応とは裏腹に、クロコダイルは一切取り乱す事なく、落ち着いた口調で俺に語り掛け、値踏みするような視線を向けてくる。

「ふんつ……見闇色が禁止と何処に書いてある？　ダメなら最初から明記しておけよ、間抜け野郎」

「違えねえが、使える奴がこんな所でセロイ真似をするたあ思つてなかつたんでな……。金が欲しけりやソコラにいる賞金首を仕留めりや良いだろ？　使えるテメエが賞金首を怖がるつてわけもあるまい……何故こんな真似をした？」

なるほど……ルフィに敗れる雑魚武海かと思つていたが中々どうして、七武海なだけの事はある。

得体の知れない俺が相手だ、例えムカついても直ぐには殺さず情報を引き出して裏を取る……そんな用心深さが感じ取れる。  
コイツが俺を殺せるかどうかは別にして、この用心深さは見習つべきだらう。

ずっと我慢は普通に無理だが、せめてクロコダイルとの対面位は武力に頼らず、忍耐と智力で終らせたいモノである。

「お前と会つて話す為だ。　普通にやつても七武海には会えないだろ？」

？」

バロックワークスを探つてゐると想われれば戦闘は避けられまい。慎重に反応を伺いながら言葉を紡ぐ。

「面白そうな話ね？」この人を呼び出して何を企んでいるのかしら？  
それに、使えるって何の「トかしら？私が見ている限りあなたは  
不審な事をしていなかつたわ……寧ろ、喜びが顔に出過ぎて勝てるの  
が不思議な位だつたわ」

カウンターに座っていた女が席を立ち、話ながら「チラのテーブル  
へとやつてきた。

華やかな店内に在つて暗い陰を背負つ女、クロコダイルのパート  
ナーにして賞金首の一コ・ロビンだ。

「お？ 一コ・ロビンか？」

「」で『ミス・オールサンティー』と呼ぶよつた真似は、いくら俺で  
もやつはしない。呼んでしまえばイゴールB・Wを知つてていると言つ  
ているようなモノで、敵対は避けられまい。

闘つて負ける気はしないが、ここで鷦野郎をブツ飛ばせば原作に与  
える影響は計り知れない、ってかグランドライン以降がほぼ白紙に  
なつてしまつ。

原作に拘らないとしても、白紙は流石にマズイだろう。

「何故私の名を……!?」

「本氣で言つてゐるのか？ 手配書見れば誰だつて判るレベルだぞ……  
なあ、ディーラーさん」

「え？ ほ、僕は、な、何も知りませえん!!」

言葉を向けられたディーラーの男は恐怖の限界を越えたのか、カ一  
ドを放り投げて逃げ出した。

「つて説だ。一コ・ロビンと氣付いてる奴も鷦野郎の威光を恐れて何

も言わないだけだわ」

「うう……私は自分で考えるようこの人に護られているのね……」

「なんだ？ 不満そうだな？ なんなら俺と一緒に来るか？」

「嫌よ。貴方と行く位なら彼と居る方がマシね」

クロコダイルを嫌つているはずのロジンは、顔色一つ変えずに断つた。

連れ出す気は全く無かったが、いつもせめハッキリ言わると軽くへこむ。

「貴様つ……姫様がいながら他に色々を使つとほつ！」

今日のキキョウさんはテンパッているのか、訳の分からぬ事を言いたいお年頃らしい。

「はあ？ デ姫様は関係無いだろ？」

「姫、デコ、覇氣……。ふう……テメヒらハンコックの手の者か？」

葉巻の煙を吐いたドヤ顔のクロコダイルは、三つのワードを頼りに俺達とハンコックを結び付けた様だが、普通に間違えている。

まあ、好都合なので乗つかつてしまつ。

「おお、おつかづ。デ姫様から世界を見てこいつて指令を受けてな？ 近くに来たからお前の顔を見に来たつて説よ

「それで？ ハンコックの伝言はなんだ？」

「いや、伝言なんて無いぞ？　俺がお前と会いたかったダケだからな」

「……話にならねえな？」一ノ・ロビン、指令だ。コイツと行動を共にして監視しない。俺の邪魔をしようとしているな……殺せ」

小さく溜め息を吐いたクロコダイルは、背後に控える一ノ・ロビンに首を向けて指令を出した。

「分かつたわ」

無表情のまま一ノ・ロビンが頷いた。

「二人とも頭大丈夫か？　目の前で暗殺の指令を受けた女を誰が連れ歩くか？」

「なら、一ノノで死ぬか？　青二才」

「あん？　夢破れた銀メダリストが、コレから輝く俺に勝てるとしても思つてんのか？」

霸王色の霸氣を放ちテーブルを挟んでクロコダイルと睨み合つ。

最近になって気付いたのだが、俺の霸王色は世界様と向き合つた事で大幅に威力を増している。

これで鰐野郎が泡を吹いて倒れたら面白いのだが、流石にソノまで雑魚ではないらしい。

「テメエつ……死にたいらしいなつ」

青ざめる口唇と違い、クロコダイルは俺の霸氣をマトモに受け付けて

尚、ふてぶてしい態度を崩さない。

霸氣を知らない訳でもあるまいに、この余裕……鰐野郎には原作で描かれなかつた自信の源でも有るのだろうか？

「ま、待つて！ 彼、海賊女帝の手下なのよね!? 今、他の七武海と問題を起こすのはまずいわ」

「どうだかな……この野郎は人の下に付くようなヤツじゃねえ。おい、女……お前ら何者だ？」

「わ、私はキキョウ。蛇姫様の命を受けてこの無礼者の護衛の任に就いている。この無礼者はワール・D・オーザ……その……今日はこの男が迷惑を掛け申し訳ない」

クロコダイルは何故か俺を無視して、背後に控えるキキョウに語りかけ、彼女は何故か謝罪の言葉を述べている。

「はあ？ 俺がいつ迷惑をかけた!？」

「護衛さん……貴女も大変な様ね」

「一コ・ロビンの同情する様な視線がキキョウへと向けられた。

それから、キキョウの説明を一応信じたクロコダイルは、一コ・ロビンを残し砂化して去つていった。

こうして俺はカードゲームで稼いだチップを金に代え、旅のお供に一コ・ロビンを加えて東の海へと旅立つ事になるのだった。

強引にカーミームベルトを越え、東の海に到着してから2週間の時が流れた。

無事に東の海へとやつてきた俺は、手始めに『斧手のモーガン』と呼ばれる海軍大佐が治める海軍支部の街を探し、状況確認に向かった。

そこで田にしたのはモーガンが失脚し、変わらうとする海軍と街の姿だった。

ルフィ達が暴れたのか？

との推察は容易に出来たが、身内の恥となる出来事に海軍の連中は揃つて言葉を濁し、推察は推察のままとなつていてる。

適当に海兵をブツ飛ばして詳細を聞き出しても良かつたのだが、海軍と無駄な軋轢を産む必要も無ければ、詳細不明のままルフィ達を追いかけるのも又一興と思い、穩便に海軍支部の街を後に……したかつたのだが、二コ・ロビンの素性がバレて一騒動が有つたり無かつたり。

今のところ、海軍に大規模な二コ・ロビン追跡の動きは見られないが、大きな動きが見られれば紋章を使って黙らせる必要も出てくるだろう。

全く以て面倒な限りである。

そんな事情もあつて逃げる様に海軍支部の街を後にした俺達は、ルフィ達が次に現れるであろう『オレンジの町』へとやつて来た次第である。

そこで、二コ・ロビンに大きめのサングラスを買い与えた後は、今後の航海プランを考えつつ街の酒場に入り浸り、海賊の襲撃を受けて

今に至る。

「どうして暴れないのかしら? ターゲットさん」

ウエスタンスタイルに身を包み倒木に片足組んで腰を掛けた一ノ・ロビンが、キキョウとコッタリとした組手に励む俺に語り掛けた。

加速させた意識の中でより正確に動くには、こうして身体の動きを確めるように、日々鍛練を重ねるのが重要と成つてくる。

普段、口クに会話をしないくせに邪魔をしないで欲しいものだ。

「はあ? 僕がいつもいつも暴れるとでも思つてんのか? 一ノちゃんや」

「貴様は海軍が相手でも暴れるではないか……海賊風情に憩いの邪魔をされ、何故、大人しくしている?」

額に汗を浮かべ俺の拳を受けながら、キキョウがなんとも失礼な事を言つには理由がある。

現在、このオレンジの街は、海賊『道化のバギー』の略奪を受けており、偶然居合わせた俺達は、街の住人と共に街の郊外へと避難しているのである。

暴れない主な理由はルフィ待ちになるのだが、これだけが理由でも無ければ、頭の良い一ノ・ロビンの前で未来知識となる「コレ」を言つわけにもいかない。

しかし、解せぬ。

大人しくしていたら不思議がられるつて何なんだ?

「俺よりもアイツらが大人しく逃げている方が不思議だろ？……  
なあ、町長さん？ 海賊に街を荒らされて、アンタラは何で黙つて逃  
げてんだ？」

近くで輪になつて愚痴を言い合ひ集団の中心に収まる人物、この街  
の町長に疑問をぶつける。

街の住人と一緒に逃げて来たのは、コレを聞く為だつたりする。

「な、なんだと！？」

「俺達だつて好きで逃げてるんじゃない！」

「そうよ！ 道化のバギーは容赦の無い海賊よ！」

「アイツラは人の命を何とも思つてないんだ！」

俺の言葉に青筋浮かべた避難民が、思い思いの事を言つてくるが、  
要は命惜しさに暴力に屈する道を自分で選んでいるダケだな。

「だつたらなんだつてんだ？ お前等は相手が恐けりや何をされても  
黙つて従つのか？ そんな態度が海賊行為の容認に繋がり、その積み  
重ねが海賊をのさばらせる原因になつていいんだろ？ お前等はそ  
んな世界が望みなのか？」

「ぐぬぬ……小わっぱめ……言いたい放題言うてくれるではないか  
！」

黙り込んだ避難民を搔き分けて、白髪の町長が現れた。

「は？ 言いたい放題？ こんなもんは素朴な疑問つてモンだ。ま、  
別にアンタラがどうじよつと俺には関係無いし、ここで海賊行為が終  
わるのを黙つて見ていたいと云つなら好きにすりゃいいわ」

俺が自由であるよ！」町長や避難民がどの道を選ぶのかも、自由。

肩を竦めてお手上げのポーズを取った俺は、鍛練を再開しようと視線をキキョウに戻した。

「黙つてなどおれんわッ!! 良いか、小わッぱ!! この街は儂が40年の時を掛けて皆と共に作り上げた宝じゃ!! 小わッぱに言われずとも皆の避難が完了した今、海賊どもに物申しに行くわいっ!!」

俺に啖呵を切った町長は「誰ぞ、鎧を持つておらぬか!?」と叫びつつ、避難民の輪の中へと消えていった。

「くつくつく……そつかよ……死にに行くか……ま、好きにしな

原作通りと言えば原作通りだが、暴力に屈することを良しとしない、意思の力には好感が持てる。

俺も、いつかは世界様の覇気に抗えるだけの意思の力を持ちたいモノである。

「悪い人ね……町長さんをけしかけて何を企んでいるのかしら?」

サングラスを掛けて立ち上がり、近寄る「コ・ロビンの口角は僅かに上がっている。

「別に何も？ 素朴な疑問だつて言つたら？ 世界の在り方は個々人の意思の集合で決まるハズだ……ならば、この大海賊時代は世界の人々の望み、と謂つことになる……その確認だ！」

「面白い説だけど、それはどうかしら？」

「じゃあ世界の在り方や歴史は誰が決めているんだ？」

「………… まあ？ 考えた事もないわね」

少しだけ考えた二郎・ロビンはわざとらじへ小首を傾げた。

二郎・ロビンは、俺の前で殆ど笑わなければ考古学者としての顔も一切見せない……」の旅で、信頼関係を全く築いて来なかつた俺の努力の賜物だ。

つてか、原作的にも海軍的にも物凄く邪魔だし、サッサと船を降りてアラバスターに戻つて欲しいのだが、どうしたモノか？

「そうかよ……ま、俺もそろそろ行くか」

町長が街に向かうならそろそろルフィが現れる頃合いだ。

モンキー・D・ルフィ……原作を通じて一方的に知つてゐる昔憧れたヒーロー……いつの間にかルフィの年齢を越えてしまつたが、この世界のルフィは一体どんな奴だろう？

まあ、今日の俺の目的はルフィじゃないし、俺に喧嘩を吹つ掛けて来ないなら、チラ見して放つて置くのが良いだろ。う。

俺が手を貸すような真似をしなくとも、自力でグランドラインを乗り越えシャボンティに辿り着くのが原作であり、ルフィである。原作を再現するなら何もしないのが望ましい位だ。

「やはり暴れるのか？ 貴様はそうでなくてはな！」

街の方角を見詰めていると、キキョウがどこか嬉しそうに語りかけてきた。

何んまいからして付いてくる気、満々らしい。

「だから、暴れねえつづーのー。てか、お前等付いてくるなよ!」

「嫌よ、ターゲットさん」

「私は貴様の護衛だ!」

こうして俺は期待と不安を胸に秘め、言つこと聞かない女を連れて、バギー海賊団に占拠された街中へと向かうのだった。

「この上だな……」

街の港に程近い、コンクリート制の大きな建物。

俺達は3人並んで屋上を見上げる。

見聞色を使つまでもなく、ばか騒ぎする音が聞こえるこの建物の屋上に、バギー一味は居るだろう。

「俺が先に行く……この上にいる連中に用があるのは俺だ。お前等は別に来なくて良いからな?」

どうせ言つことを聞かない一人に言つだけ言つた俺は、民家の壁を蹴つて、建物の屋上へと掛け上がる。

屋上の光景が目に入ったその瞬間、

ドローン!!

耳をつゝざく音と共に、砲弾が俺に迫る。

「はあ？」

なんだ？ このタイミングは？

内心で軽くボヤキつつ意識を加速させた俺は、迫る砲弾を慎重に受け止め、衝撃を逃すように身体を一回転させて砲弾を上空にじぶん投げた。

「キキョウっ！」

「任せろー！」

キキョウの矢が砲弾を貫き、爆音と爆風が辺り一面に襲い掛かる。つ。

ドローン!!

キキョウの矢が砲弾を貫き、爆音と爆風が辺り一面に襲い掛かる。

「何なのよお！？」

「アソッ、スンゲエえ！」

「正に、ド派手！！ つてビツなってる!?」

屋上では爆風から顔を覆いながら驚くナミ、檻の中で喜ぶルフィ

……そして、こんな時でもノリ突っ込みを忘れないバギーの姿。

.....。

なんだ、この状況は？

ルフィは櫛の中……ナミはバギーの近くに倒れて、ゾロに倒してはいる場に居ない。

これで原作通り……なのか？

まあ、良い……余り自信は無いが、とりあえず目的を果たしてから成り行きを見守るとしよう。

「おこおこ……こきなり大砲をブツ放すたあ、どんな了見だ？ 道化のバギーさんよお？」

空を蹴って屋上に降り立った俺は、今日の目的であるバギーと向き合つ。

「あら？ ブツ飛ばさないのね？ じつこつ風の吹き回しかしい？」

建物の壁に生やした腕を使い梯子の様に登ってきた二ゴ・ロビンの手には、金の詰まつたアタッシュケースが握られている。

背中から生やした手にケースを持たせ運んで来たらしい……花のように自分の手足を咲かせる能力『ハナハナの実』やはり、中々便利で厄介な能力だな。

「マイツラに用意があるって言つたら？」

振り返らず説明すると二ゴ・ロビンは「やつ」とだけ呟いた。

「なんだあオメえラ!? よおくもオレ様のバギー玉を無駄にしてくれ

たなあ!? ああん? 「

眉間にシワを寄せ笑える顔を作り両手を腰に当てたバギーが、臆する事なく顔を突きだし寄つてくる。

独特のメイクと口調がなんとも愉快な海賊らしい海賊、道化のバギー。

平均300万の東の海において、1500万もの懸賞金が懸かっているのは伊達ではない様だ。

「あん? 無駄なのは街への破壊行為だつーの……まあ、良いや。喜べデカツ鼻、お前等は俺の護送団に選ばれた!」

バギーのデカツ鼻を指差した俺は、ビシッとポーズを決める。

ここ数日で薄れゆく原作知識を吟味した結果、これから先はバギー海賊団について行くのが面白そとの結論に達していたのだ。

原作でもグランドラインを突き進む事になるバギーを適当に誘導しつつ、ルフィ達を追い掛ける……これぞ、面倒な雑用はバギーの一味に押し付け、原作に与えられた影響も少ないのであるう一石二鳥の航海プランだ。

「だあれがデカツ鼻だ!! 派手にフザケタ野郎だ……オレ様を道化のバギーと知りながらのその暴言、何処のどいつか知らねえが許してやる訳にやあいかねえなあ」「

「悪い悪い……俺の名はオーザ、ワール・D・オーザだ。こっちのサングラスは二コリともしない二コさんで、あっちのビキーは男嫌いのキヨウだが……赤つ鼻の方が良かつたか? バギーさんよ?」

「…………むかちーん……俺やあもう切れたぜ。これ程腹が立つたの

は久しぶりだ。野郎共っ！ このハゲ阿呆を派手に殺せえ！！

「了解しやした！」

何故か怒ったバギーの指示に従い数人の男達が飛び掛かる。

「させるかつ！」

キキョウが弓をしならせ束ねた矢を放つ。

「ぐえ!?」

「ぎやあ!?」

「『』ふつ!?」

放たれた矢は空で別れると飛び掛かる男達の鳩尾に当たり、男達を遙か後方に吹き飛ばした。

「え？ 今の……どうなってるの？」

呆れたナミがポカンとしている。

まあ、常識で考えれば弓矢は人を吹き飛ばす様な武器ではないからな。

「ハアアアキイイ!?」

大口開けたバギーがキキョウと男達の消えた方向をキヨロキヨロと首を振って見返している。

驚く中にも事実を言い当て「ミカルさも忘れない……やはり、思つた通り愉快な男だ。

「その通りだ。俺と『マイシ』は使える……闘うのも一興だが、俺の話を聞いてからでも遅くはないぞ」

「……言ってみな

「お前、グランドラインに行くんだよな？ ついでに俺達を連れて行けって話だ……別にタダって訳じゃないぞ。二刀さんや」

背後に控える二刀・ロビンに向けて手を伸ばす。

「その呼び方なんとか成らないのかしら？ ターゲットさこ

「呼び名が変なお互い様だ……ほらっ受け取れ……一億入っている。それで俺達をシャボンディに連れていけ」

二刀・ロビンから受け取ったケースをナミに向けて投げ渡す。

「い、一億ベリーッ！」

ケースを受け取ったナミは、直ぐ様ケースを開くと物凄いスピードで札束を捲り確認してゆく。

「ほう……偽物じゃない様だなあ？ 一億って言やあ大金だ……悪くねえ話だが、オメエを連れて行かなくて、もつと楽に一億手に入れ  
る方法がある……何か分かるかなあ？」

顎を擦つてナミの行いを見ていたバギーはナイフを取り出すと、悪  
どい顔をしてそのナイフに舌を這わせてくる。

「流石、道化のバギー……海賊の鏡の様だな？ 出来るかどうかは別

にして、俺達を殺して一億を手に入れようとするか……だが、その金が前金だとしたらどうする?」

「なあに! 一億が前金だとお? オイツ……条件を言つてみろ!」

「期限は無しで護送を優勢しなくても構わない……要は好きに航海してお前等がシャボンティに辿り着くまでの間、俺を客としてお前の船に乗せろって話だ。無事にシャボンティに到着したら後、五億払おう……バギー海賊団なら簡単な話だよな? それの、野郎ども!!」

バギーを煽るなら手下を煽るべし。

良くな悪くも親分肌のバギーは手下に持ち上げられれば断れない……これは、原作からも明らかだ。

「ヤツホーイ! これで俺達も金持ちだ!」

「流石、我等が船長バギー様!」

「入つてくる話がデカイぜ!」

「よおーしつ野郎共、みなまで言つんじゃねえ……オレ様はグランドラインを制する男だ! モノのつこでにお前等を乗せりゃあ五億手に入るつてえ訳かっ! だあはつはつはつは……」

「バ・ギ・い!」

「ご・お・く・ー・」

「バ・ギ・い!」

「ご・お・く・ー・」

「バ・ギ・い!」

「ご・お・く・ー・」

バギーが了承とも取れる高笑いを上げると、手下達が待つてましたとバカリに離し立てる。

「契約成立だな？」

バギーに向けて右手を伸ばす。

「おうよ……派手にフザケタ野郎だが、客となつたからにゃあ歓迎してやるぜ……野郎共！ ロイツ等は今日からオレ様の客だあ、丁重に持て成してやれ!! ただあし、金が払えねえってなつた時は覚悟しな？」

「？」

俺の手を握り返したバギーが尤もな事を述べる。

契約の概念が通用するなら裏切られる心配は無いだろ？。

「シャボンティにさえ行けば、五億だろ？が百億だろ？が問題ねえよ……つまりだ、五億を手にするかどうかは、道化のバギー、お前次第だ」

「何度も言わすな……オリヤア、グランドラインを制する男だぜえ？」

「えーっ!? グランドラインを制するのは俺だあ」

今の今まで大人しくしていたルフィが檻の中から待つたをかけると、ナミが「あのバカッ」と小さく呟き、額に手を当て溜め息を吐いた。

「くつくつく……そつかいそつかい。麦わら野郎、グランドラインを制するのはバギーでなく、お前か？」

「ああ。グランドラインを制して海賊王に俺はなる

叫ぶでもなく、虚勢を張るでもなく、実に自然体のままでルフィは

あの名言を口にした。

なるほど……この世界でも、ルフィはルフィらしいな。

「くくっ……ハアッハツハツハツ……だつてよ？ 道化のバギー、お前さんと契約したのは俺の間違いかあ？」

名言を聞いてテンションの上がった俺は、笑いながらバギーの肩をバシバシと叩く。

「阿呆ぬかせえ！ あんな小僧が海賊王に成れるわけねえだろうがつ」

「ですよねえ……うちの親分世間知らずで」

アタッショケースを両手でしつかりと抱き抱えたナミは、バギーを宥めにかかっているらしく。

「そりゃあ？ あの状況でアレが言えるんなら大したモンだぜ……ま、後はお前等で勝手にやつてくれ。俺達は酒でも頂いてるぜ」

軽くナミの肩を叩いた俺は、バギーとナミに背を向けて、バギーの一味が用意していた酒宴の席へと足を運ぶ。

「ちよつとアンタ！ 誰だか知らないけど煽るだけ煽って行かないでよー もうつ、アンタ達みたいな考え方無しを見てたらウンザリするわー！」

「分かるゼナニア……オリヤアもう疲れたぜ。あの派手阿呆だけでも厄介なトコに、あの麦わら小僧だ……ヨシツ、オメエにバギー玉を一つプレゼントしてやる。派手に吹っ飛ばしなー」

「え？ ひょっと……!?」

揉めるバギーとルフィ、そして燒てるナミを肴に酒を飲む。  
バギー海賊『団』と言つだけあって、きつちりとした料理人がいる  
らしく、飯はかなり重い。

一億は今の俺のほぼ全財産だが、バギー海賊団に護送依頼を出した  
のは考えていたよりも、良い買い物だったかもしれない。  
金の力で自発的に言つことを聞いてくれるなら、暴力で押さえ付け  
るよりも余程安全だらう。

この世で最も手強い敵は、味方の顔して背後から狙う奴だからな。  
「止めなくて良」の?」

いい気分に水を刺すかの様に言葉を発するは、隣に座る二ロ・ロペ  
ン。

普段マタモト話さないくせに、今日に限つて邪魔をしてくれる。

あれ?

そういうや、最近は話し掛けられる頻度が増えた様な……?

ま、気のせい。

「ん？ 何をだ？」

「一ノ口・ロビンはいずれ俺の元を去る運命だ。出来るだけ素つ氣なくを心掛け、肉を頬張りながら一ノ口・ロビンに意識を向ける。

「何つて、ターゲットさんはあの子達に会いに来たのでしょ？ このままだと2人とも危ないわよ」

「……何の話や！」

「貴方の話よ？ 貴方が道化のバギーに会いに来たと言つなら、それはおかしな話になるわ。海賊達が現れたのは昨日の夕暮れ……今日になつて会いに来たのは何故かしら？ それだけでないわ……貴方が東の海で真っ先に向かつた海軍の島。あそこにはあの麦わら帽子の子がいたらしいわね……そして、次に立ち寄つたこの島にも彼が来た。コレって偶然かしら？ もっと言えばグランドラインを乗り越える術を持ちながら、護送団を雇つのもおかしいわ……一体、貴方の狙いは何処にあるの？」

「ふんつ……これだから頭の良いヤツは嫌いなんだ。何にでも理由を付けて探るうとじやがる……大体、海軍の島に麦わらが居たつて何故知つている？」

「酒場で聞いたのよ」

「なんだそりや？ 僕が聞いても教えなかつたくせに……あの海兵ども、男女差別か？」

「高圧的に聞く貴様のせいだろ？」「

肩に乗る蛇に魚を与えながらも、キキョウは鋭い突っ込みを入れて  
くる。

「そうね」

「俺は普通に聞いたダケだ！　まあいい。ニーハ・ロビン、お前の問いか  
に対する答はこうだ……お前には関係無い、つてかサツサとアラバ  
スタに帰れよ？」

「嫌よ……私が邪魔なら殺すか海軍に突き出せば良いわ。クロコダイ  
ルを恐れない貴方になら出来るハズよ」

実際に魅力的な提案だが、原作的にも絶対無理だ。

「ちつ……それが出来りやあ苦労はしねえつづーの」

「ふふ……変な人ね」

「お前、今笑つた……？」

『キヤアアアア！』

和みかけたのも束の間。  
女の叫びに視線を送る。

視線の先ではナミが大砲の導火線を素手で握りしめていた。

そこに迫る複数の男達。

まさに絶体絶命。

「助ける？」

「いや、問題ない」

ギィイン!!

ナミと海賊達の間に割り込む一人の男。

海賊狩り、ロロノア・ゾロの登場である。

「ゾロオ!!」

ナミの窮地を救う見計りつた様なゾロの登場に、ルフィが檻の中で喜びの声を上げた。

「あれが……海賊狩りのゾロ……!?」

「ふーん……カジノの支配人が口ロロノア・ゾロを知ってるのか?」

我ながらワザとらしことは思いつつ、揉めるバギー達を尻目に、隣で嘆息を漏らした二ノ・ロビンに突っ込みを入れる。

「ええ……彼、この海では有名人みたいよ」

「へええ~」

「何かしら? 私からすれば、貴方が口ロロノア・ゾロの名を知っている方が不思議よ。それに、彼が現れると知っていた風なのむだつこいつ事かしら?」

二ノ・ロビンに疑惑の眼差しを向けるも、涼しい顔して切り返された。

長年に渡つて様々な組織を転々としてきた二ノ・ロビンの顔色を変えさせる事は難しく、又、信頼を勝ち取ることは更に難しい。

難しいと言つても原作を知る俺は、二ノ・ロビンの信頼を勝ち取る方法も知つている……だが、原作の方法を使おう等とはこれっぽっちも思わない。

何故なら、答の判つている出来事程つまらないモノはなく、二口・ロビンとまじつして互いの腹の探し合ひをしている方が余程面白いのだ。

目の前で指令を受けておきながら、何も企んでないと云つ張る女。方や何も知らないハズが、東の海にやたらと詳しい男。

明らかに不自然で有りながら、シラを切り続ける相手の尻尾を掴んでギヤフンと言わせる……まあ、言わせたからどうだつて話だが、面白いモノは面白いんだから仕方がない。

俺と二口・ロビンは別れが訪れるその日まで、きつとこんな関係を続けるのだらう。

「それは氣配を読んだからだ……この男は霸氣の扱いダケは長けているからな」

「ハキ……不思議で便利な謎パワーね」

蛇の口を手にしてやって来たキキョウの説明に、二口・ロビンが二口・ロビンからぬ反応を示すのは、彼女が霸氣を苦手としているからだ。

それは兎も角、俺が得意なのは霸氣だけでなければ、霸氣は謎パワーでもない……一人揃つて色々と間違えている様だ。

「キキョウさんや……外海の者にソレを教えても良いのかえ？」

霸氣、それは意思の力。

本来なら誰しもが備え、使える力。

しかしながら、世界はそれを隠し、まるで存在しないかの様に振る舞う。

使える者達は自らの優位を保つ為に隠し、海軍は霸氣を広めた場合

のリスクを危惧するあまり、伏せる。

今では4つの海やグランドライン前半の海で、霸氣に關して安易に吹聴するのはタブー視されるようになり、タブーを破れば何処からともなく最速の大将が現れ、全てを破壊し尽くす、とのまじとしやかな噂まである始末だ。

そして、この噂は恐らく真実であり、天竜人の俺であつてもタブー破りは許されないだろ？

霸氣の力と霸氣を隠す事に天竜人の権限を越える秘密があるのなら、それはつまり、世界の秘密に繋がる……そんな気がしてならないが、今の俺の力では本氣を出した最速の大将を相手にするのは無理だろう。

今は焦らず世界を巡って力を高め、最速相手でも負けない自信が付いたその時こそ、このタブーに挑む時となる。

「構わん。私にとつてこの女は、貴様に苦労させられる同士の様なモノだ」

同士ならば安易な吹聴には当たらない。

キキョウはきっとこう言いたいのだろうが、色々と解せない。

解せないが、何時までも無駄話に興じている場合でも、想像を元にした謎を考えている場合でもない。

殺る気満々のバギーと、ヤル気の無いロロノア・ゾロは一触即発の状態で、今にも戦闘が始まろうとしているのだ。

「はあ？ 僕に苦労せんのはお前等の方だろ？ まあ、いや……キキョウ、あの一人どっちが勝つと思つ？」

軽く抗弁した俺は、真剣な表情を造つてキキョウの見立てを聞いてみた。

「そう、だな……腹巻きの男ではないか？ 貴様が見定めた赤鼻の男は、そう強くはあるまい」

「うん、間違いじゃない。単純な戦闘能力なら海賊狩りが上だろう。でも、それだけで決まらないのが外海の闘いつてヤツだ」

「なに？」

ビキニ姿で訝しげに両腕を組むキキョウは、知つてか知らずか小さくない胸を強調している。

キキョウはここに至るまでの航海で、男の欲望のなんたるかを学ばなかつた……言い寄る相手をブツ飛ばせる彼女だから、男の欲望の脅威が解らないのは仕方ないのかもしれない。

しかし、悪魔の実の脅威のなんたるかは「学べませんでした」と済ます訳にはいかない。

霸気を使えるキキョウは強者であるが、この世界はそれだけでやつていける程甘い世界では無い。

霸氣の力は強力無比……しかし、悪魔の実も又強力……いや、それ以外の力も霸氣使いの命を脅かす事は十分に可能であり、キキョウにはそれを学んで貰いたいのだ。

キキョウが俺の側に在る限り、護つてやるものやぶさかではないが、俺の能力では広範囲攻撃に対応しきれない可能性は大いにあり、結局、自分の身を護るのは自分であり、キキョウの身の安全を考えるなら、キキョウ自身に強くなつてもらつのが一番手堅い。

キキョウの身の安全……それは、俺の海難救助に繋がる事であり、決して疎かに出来ないので。

その為の第一歩として、悪魔の実のデタラメさを伝えるべく、この戦闘を注視したいと思う。

盛上がる手下達を蹴り分け進んだ俺達は、最前列で三人並び高みの見物を決め込んだ。

「まあ……見てな」

刀を口にし三刀流の構えを取るロロノア・ゾロ。

周囲の手下達はバギーの名を連呼して大いに盛上がっている。

「派手に死ねつ！」

バギーは右手に大きめの短剣、左手には何本ものダガーナイフを器用に握り締め、ゾロは目掛けて不用意に飛び上がった。

シャキン!!

交差するバギーとゾロ。

「なんて手応えのねえ野郎だ」

吐き捨てる様に呟いたゾロが刀を収めた直後、片手足と胴体を切断されたバギーが倒れ込んだ。

「む？あの赤鼻の男……妙だ」

「解るか？」

「ああ……あの様な姿に成りながらも、まるで生氣は衰えていない」

「何だとつ……!?…………い　い!?」

キキョウの解説を聞いたゾロが振り返ると、短剣を握った手首が宙に浮いていた。

宙に浮く手首がゾロを目掛けて飛んでいくも、ゾロの刀に払い除けられる。

「派手阿呆があ！　余計な事を喋るんじゃねえ！！　テメエのせいで刺し損ねたろうがっ」

バラバラになつたパーツを浮かせて合体したバギーが、不意打ち失敗の責任をキキョウに擦り付けた。

「キキョウさんや……あの『デカつ』鼻、お前の事を阿呆扱いしてんぞ？」「それは許せんな……人のセイにするとは戦士の風上にもおけん。後で痛い目に合わせてやろう！」

「何故そうなるつ？　派手阿呆が一人い！？」

「赤鼻さん……」の一人、特に男の方はマトモに相手をしたらダメよ。それに、今は剣士さんの相手に専念するべきじゃないかしら？」

「どこのかで見た顔のネエチャンだが、お前の言う通りだな……ロロノア・ゾロ、今はテメエの相手をしてやるぜぇ!!」

二七・ロビンの忠告を聞いたバギーは、何処からともなくダガーナイフを取り出すと、ゾロに向かつて投げ付けた。

「な、なんだテメエ等は!?」

驚きながらも迫るナイフを刀で弾き、再び三刀流の構えに入るゾロ。

「オリヤア、切つても切れないバラバラ人間！　ロロノア・ゾロよ……」

貴様がいくら腕に覚えがあつても、剣士である以上端から勝ち目は  
ネエのさあ!!

余裕の笑みを浮かべたバギーが短剣を握った手を振り回し、ロロノ  
ア・ゾロへと襲い掛かる。

「くつ……どいつなつてやがる!?

剣技と呼べないバギーの攻撃はロロノア・ゾロの三本の刀で捌かれ、体勢を崩したバギーの身体は何度となく斬り付けられる。しかし、斬つても斬れない道化のバギー。

それどころか、斬られる度に宙に浮く手足が予想外の方向から迫り、ロロノア・ゾロの体表に小さな裂傷を産み出していく。

「剣士さんは隨分とやりにくそうね?」

いつの間に用意したのか樽に片足組んで座るニーハ・ロビンは、現在の戦闘状況を的確に言い表している。

攻撃を捌く男と、攻撃を受けても平気な男……互いにノーダメージでも後者の方が明らかに有利だらう。

尤も、バラバラの実の能力発動が体力を消耗する類いのモノなら、勝負はどう転ぶか判らない。

「そりゃ そりゃ……バラバラの実は切断系の攻撃に対して無類の強さを發揮するからな」

「バラバラの実……それがあの赤鼻の男が喰つた悪魔の実とやらの名か? 確かにデタラメな現象を引き起こす様だが無敵の能力でも無いだろう? 斬つても宙に浮くと警戒さえしていれば、腹巻きの男の様に対処は出来る。攻撃を続ければその内倒せるのではないか?」

キキョウは闘う「一人から視線を逸らさず強気ともとれる分析を披露するが、良い傾向だ。

「そうだな。知つていれば対処は出来る……つまり、知らなければどうだ？ この世界にはデカつ鼻の様に、予想も付かない『デタラメな能力を持つ人間が大勢いるんだ』

「注意を怠るな……と、いうことか」

「そうこうつた」

大きく頷くキキョウを見た俺も満足気に頷く。

今まで言わずともキキョウに俺の言わんとする事が伝わった様で何よりだ。

にしても、キキョウが悪魔の実の『デタラメさ』を学んだ今、こんな闘いに用は無くサッサと終わって欲しいのだが……この闘いつてどんな結末を迎えるんだつけ？

推測通り、悪魔の実の能力発動の代償に体力を奪われているのか、徐々にバギーの息は荒くなり、それに合わせて元から無かつた攻撃の精彩がさらに欠けていく。

今そのまま戦闘が続けばバギーに勝ちの目はなく、ゾロに倒されてしまふ気がする。

原作では確か……。

.....。

「あ……」

「どうした？」

「何かしら？」

「いや、何でもない」

女一人から疑惑の眼差しを向けられ取り繕つも、何でもない事はない。

これは非常にマズイ。

俺の記憶が確かならゾロとバギーの対決は、バギーの不意打ちが成功してゾロが逃げを打つて終わる……少なくとも、バギーを倒すのはゾロではなくルフィのハズだ。

なるほど……本来なら居ない人間がただそこに居るだけでも、变化は起ころうといつコトか。

もしも、俺が考えるよりも原作が『デリケートに出来ているならば、ニコ・ロビンを連れ歩くのは問題が多そうだ。

ニコ・ロビンは然るべき時期に『歓迎の街』で下ろしてやれば、原作の修正力が働いて元に戻ると踏んでいたが、早田に手を打った方が良いかも知れない。

と言つても、ニコ・ロビンは基本的に俺の言つ事を聞かないし、かと言つて事情の説明も出来なければ、殺すのは論外だ。

なんだこれ？

もしや、早くも原作ブレイクが避けられない所にまで来ているのか  
？ んな、アホな。

まあ、ニコ・ロビンは一先ず置いておくとして、今はこの状況をどうするかだな。

俺が会って話をしたい人間の多くは、原作のストーリーの中に入っている。

出来れば無闇に原作を変えたくないのだ。

.....。

よし、刺そう。

俺がゾロの背後から刺してやればルフィが逃げを唱え、原作から外れた軌道が修正されるハズだ。

そう考えた俺は、手近に落ちていた短剣を拾い上げゾロの隙を探り始めた。

「貴様つ!? 何をするつもりだ!?

すかさずキキョウから非難の声があがる。

「あん? 僕が何をしようが俺の自由だ」

「ならば私がどうしようと私の自由なんだな? 名を賭けて闘う戦士の邪魔をするなら、貴様と言ふと許さんつ」

俺を睨むキキョウの表情は真剣そのものだ。

言つこと聞かない奴だとは思っていたが、見事に邪魔をしてくれる。

まあ、キキョウを押さえ付けてまでやることでもなければ、これだけ騒げば不意打ちで刺すのも難しいだろう。

「はいはい、バレたら出来ないし、もうやらねえよ。でも、何で判った

んだ？ お前ってそこまで見聞色が得意だったか？」

短剣を投げ捨てた俺は、今後の為にもバレた理由を聞いてみる口にした。

何かしょとある度に出鼻を挫かれては、この先が思いやられるのだ。

「私が得意なのではない。わざも言つたが、貴様が扱いに長けているのだ。それ故に、貴様が事を起しあうとすれば雰囲気がガラリと変わり、私でなくとも直ぐに気付く」

「マジで？ そうなのか？ 」「うそこや」

「ええ。詳しい口の判らない私でも、ターゲットさんが暴れようとすれば気付くわ。空気が張り詰めるとでも言ひのかじり？」

「そうか」

澄ました二口・ロビンの解説に素っ気なく応えてみたが、口もマズイ。

このままだと俺は不意打ちが出来ないって口にならぬぞ。

原作しかり、女しかり、世の中思い通りにほいかないらしい。

まあ、思い通りにいかないからこそ面白いのだが。

「何を」「りや」「りや言つてやがる！」「の派手阿呆があつ、手え貸すんなうサッサとしまがれ！」

明らかに押され氣味となつたバギーが、首から上を宙に浮かせて勝手な事を叫んでいる。

「はあ？ グランドラインを制するバギー様ともあろう御方が、手を貸して欲しいってか？」

「アホぬかせつ！ テメエから殺さうとしたんだろうがッ！」

「そりだっけ？ まあ、やるのは無しだ。俺は忙しいんだから邪魔をするならブッ飛ばすぞ？」

全く……俺は原作修正の次なる手を考えることにしている。  
どう転んでも敗北するバギーに構っている暇など無い。

「んなあ！？」

「言つたハズよ？ この男は私達と違つ感性で生きているの……マトモに相手をしても無駄よ」

「おーおー……仲間割れかあ？ デカツ鼻が負けを認めてルフィを解放するなら、オレに用はない……そつちで勝手にやつてくれ」

鞘に納めた刀で肩をトントンと叩くゾロの戦意は既に消えている。  
剣の実力ならゾロが上。

最初から闘うコトに乗り気で無かつたゾロは、これ以上バギーと闘う価値が無いと判断したのだろう。

さて、困ったな。

そのまま行けば原作ブレイクは避けられない。  
歴史の修正力は何処に消えたんだ？

『出てこよーい！ 道化のバギー!! ワール・ド・オーザあ!!』

途方に暮れかけたその時、階下から老人の叫ぶ声が聞こえた。

果たして、響く老人の叫びは俺にとっての助けとなるのか？

予断を許さない状況の中、俺は呼び掛けに応じて屋上の端へと移動するのだった。

「お？ 誰かと思えば町長のおっさんか？ 死にに来たのか？」

階下には革製と思われる鎧に身を包み、細い槍を持ったこの街の町長、フードルが息を切らせてやって来ていた。

原作とタイミングが違つ氣がするのは、氣のせいだと思いたい。

『やはまつン！」ねつたか、この卑怯者めが！ 道化のバギーも許せんが貴様はもつと許せん!!』

顔を覗かせた俺を見るなり、何故か町長が激怒している。

「はあ？ 端からおっさんの許しなんかいらねーし。てか、卑怯者つてなんだ？」

『惚けよるかつ。ワール・D・オーザ！ 先行した貴様がこの街の様子を探り、道化のバギーを導いたは明白！ ワシと勝負しろお!!』

「なんだオメエ？ 悪い奴か？」

檻の中に囚われたままのルフィイが、何処か惚けた声を出す。  
ルフィの自由を奪っていたロープはいつの間にか外されており、事の成り行きをリラックスして楽しんでいる様だ。

「まあ、此こか悪いかで言へば悪い奴だな」

「あら？ 血覚があつたのね？」

キキヨウを連れて寄ってきた二コ・ロジンはこんな時でも涼しげだ。

「まあな。で？　あのおっさんはどうして怒ってんだ？　そもそも俺はこの街で船に乗った覚えがない……町長が何故、俺の名を知っている？」

「さあ、分からないわ。だけど、何か勘違いしているようにな

『「うひ、何処までも惚けあるか！　見よ、コレが動かぬ証拠じゃ！」』

俺と二コ・ロジンのやつ取りを聞いたブーナーが懐から一枚の紙切れを取り出し、「チラに見せようと天に翳した。見よ、と言わざるも細かな所は見えないが、レイアウト的には俺の手配書と見えなくもない。

「うほお！　お前、賞金首か！　良いなあ……幾らだ？」

櫻を掴んだルフィは体重を前後に掛けて櫻」と隣に移動してきては、俺と一緒に手配書を見てくる。

「知るかっ！　大体だな、賞金首の何が良いつてんだ！」

「なんだお前え、知らないのか？　海賊は賞金首なんだぞ」

「いや、俺は海賊じゃねーし。つてか賞金首ですらないぞ？」

「じゅあ、アレは何なのよ!?　遠くてよく判らないけどアレってアンタよね!?　確かさつきワール・ロ・オーザって船に乗っていたし

「同姓同名の他人の空似だな。俺が賞金首になるなんて事は有り得ない」

「これでも俺は天竜人だ。

支配者が追われてどうするかと話である。

『そつかつ……さては貴様、賞金首に成った事を知らぬのじやな？  
ならば教えてやるわい！』

再び懐に手を入れた町長が新聞らしきモノを取り出すと言葉を続ける。

『海軍狩りのオーザ!! 貴様は海軍の船と見れば問答無用で襲い掛かり、この1週間だけでも12隻の船と200人近い海兵が犠牲となつたのじや！ 幸い死人は出ておらぬ様じやが、精神に異常をきたす者が数多く出ているとこの記事には書かれてある！ 貴様に懸けられた懸賞金はつ……100万じゃ!!』

「ぶわつはつはつは

「小物じやねーかつ」

「笑つてる場合かつ、海軍狩りなんて、どう聞いても危ない奴でしょっ！」

「なんだテメエ？ 初頭手配にビビつてオレ様に庇護を求めたのかあ？」

「大変ね、その金額だと小物狙いの賞金稼ぎに狙われるわ

「素直に姫様の好意を受ければこの様な面倒事にはならんモノを……貴様の考える事は分からん」

俺の賞金額を聞いたルフィ、ゾロ、ナミ、バギー、ニーハ・ロビン、キキョウの反応である。

「はあ!? 揃いも揃つてふざけんな! 大体なあ……なんだ、その安い金額は!? 100億の間違いだらうが!!」

そもそも、天竜人である俺がどうして賞金首になつてゐるんだ? センゴク辺りの嫌がらせか?

「ふふ……ホント、おかしな人ね。でも、100億は言こ過ぎだけど、ターゲットさんの強さを考えれば100万は低すぎゐるわ……海軍支部が独自に懸賞金を懸けたのかしら?」

「は? そんな事が支部に出来るのか?」

「ええ。本部に報せる程でもない小さな案件や、報せたくない不祥事の絡む案件なんかは支部が独自に手配書を発行するやうよ」

なるほど……支部単位だと予算が無いから金額が安いって感じか。原作には無かつたシステムだが、考えてみれば広い世界の全てを本部が取り締まるのも無理がある。

ある程度の裁量権を支部に持たせているのだらう。

「つまりこれは、あの中佐野郎の仕業つて訳か? やつてくれるぜ……まあ、賞金稼ぎに追われるのも一興か。死なない程度にあしらつてやるや」

「……よ面倒となれば、本部に掛け合つて手配書を取り下げさせれば良いだけだし、大した問題は無さうだ。」

「…………私のせいにしないの?」

意味の分からないとをせりへー口・ロビンは何時になく真剣だ。

「なんだそりゃ？ 頭の良い奴つてタマに意味わかんねえ事を言つよな？」  
「やんや……お前は一切、関係無い」

町長の持つ新聞に書かれている事は事実だ。

事の起こりは、海軍支部の街で二一〇・ロビンの素性に気付いた中佐野郎に「彼女は七武海の部下」だと叫びてもクソ真面目に逮捕しようとした事に始まる。

原作再現を心掛ける俺は当然、中佐野郎をブツ飛ばした。  
それ以来、執拗に追つてくる海軍船を霸王色で無力化する日々が続き、当初は何の目的で航海しているのか確認していたが、最近では海軍船を発見、即霸王色となつていてる。

イチイチ確認するのが面倒なのだ。

この俺の行動が記事に成つていてるのだらう。

ここに、二一〇・ロビンが責任を感じる要素は一切なく、俺が俺の意思で動いた結果でしかない。

「そう……それで、この状況をどう治めるのかしら？」

「そう、だな……」

周囲の状況を改めて確認する。

ルフィは自由な手を伸ばしてゲットした肉を檻の中で喰い、重傷を負つていないゾロはまだまだ闘えそうだが、戦意が全く感じられない。

この一人が明らかに原作から外れた行動をとつてているのも問題だが、更にマズイのはなんと言つてもナミである。

彼女が警戒の眼差しで俺を見るのは良いとして、このまま檻を碎いてルフィを出してやつたとしても、バギーと麦わら一味の戦闘が始まると微妙な感じで、ナミの仲間入りフラグが成立しない気がしてならない。

「ここに至っては歴史の修正力に期待するしかないが、ビリしてこつ  
なつた？」

次に原作干涉の機会が有れば、更なる注意が必要となりそうだ。

「とりあえず、町長のおっさんには寝てもいいつか」

これ以上無駄に騒ぎ立てて、事を大きくされても面倒だ。

俺は階下で騒ぎ続ける町長に向けて霸王色の霸氣を放った。

『むむ……小わっぱの分際でワシを威圧するか？』 じゃが貴様の思  
い通りにはさせんっ！ ワシはこの街の町長じやあ、例え死んでもこ  
の街は護つてみせるわい!!』

霸王色を受けた町長はビクッと身体を硬直させて汗を噴き出すも、  
大声を張り上げて意識を保とうと食こ下がる。

「へえ～？ コレに抗つか？ 大したモンだな……だが、何人も俺に  
は抗えない……何故なら俺が、偉いからだっ！」

見事な覚悟と意思ではあるが、高々名も無き街の町長に抗われては  
天竜人の沾券に関わる。

更なる意思を籠めて霸氣を放つ。

ドサッ！

俺の全力に近い霸氣を受けた町長が白目を向いて力なく崩れ落ち  
た。

「一んの派手阿呆があ！ 派手にやつ過ぎだー。」

「あん？」

「見てみやがれ！ コレから海賊狩りを仕止めよつて時に、オレ様の部下まで倒れてるじゃねえかあ！ カバちゃん!? モオジイ!?」

大袈裟に騒いだバギーは謎の名を叫びながら、手下の元へと駆けていった。

その先では確かに手下が白目を向いて倒れている。

俺が町長に向けて前方に霸王色を放ったダケで倒れるとは、情けない奴等だ。

「そんなモンは倒れる方が悪いつーの……余波だけで倒れるつて、ドイツもコイツも覚悟が足りてないんじやないのか？」

手下よりも近くに居たルフィ達は健在なのだ。

今日バギーの一昧が負けるのは確定事項だが、グランドラインの航海に耐えられるのか心配になるレベルである。

霸気とは意思の力。

そして、霸王色はそれが顕著に現れる。

町長が俺の霸王色に抗つてみせた様に、肉体的な強さよりも精神的な強さがモノを言つのだ。

まあ、肉体的に強い奴はそれが自信に繋がり精神的にも強いので、単純に霸気に耐える奴は強いと考えるのも間違ひではない。

それはさておき、バギーにゾロとやり合つ氣が残っているのなら、それを利用すれば原作の修正はなんとかなりそうだ。

「今のつて、何……？ アンタなにしたのよ？」

「殺氣……とも違うようだな？ 一体、テメエ何をしやがった!?」

「すんばえっ！ おー！ お前つー ジリザリしたんだ？」

順にナミ、ゾロ、ルフィだ。

三者三様に聞き方は違えど、似たようなコトを聞くのは類友だからだろうか？

「馬鹿かお前等？ どうして今日会つたバッカリの奴等に教えてやらなきゃいけねえんだ？ 知りたきや自分で何とかしろ」

「ケチな奴だなあ。オマケになんか偉そだだし、オレ、お前のコト嫌いだなあ」

檻の中で胡座つぽく座るルフィは「アハハ」と笑い<sup>シ</sup>機嫌だが、激しく間違えてこる。

「ちよつとい ルフィ!?」

「おーっ！ 麦わらあ!!」

俺の怒声を聞き檻に近付いていたナミが立ち止まる。

「なんだあ？」

「俺は偉そなんじやないつ！ 偉いんだ!! そことこ間違えるなつ！」

「そうか、わりい。お前、王様か何かか？」

「そんなワケないでしょ！ 何処の世界に賞金首になる王様が居るのよつ…… ハア、 アンタ達一人とも意味わかんない」

何故か疲れた顔したナミが額を押さえて天を仰ぐと、大きく溜め息を吐いた。

「案外いるかも知れないぞ？ ま、俺は王様じゃないけどな

「ふーん。 だつたら、お前はどこが偉いんだ？」

ルフィは鼻をホジリながらも、中々鋭い事を聞いてくる。

「さあ？ 判つてるのは自分が偉いというコトだけだ…… 何故偉いのか自分でも判らない……だから俺は自分が偉い理由を探す為に旅を続けるのさ」

「何よそれ？」

「ふふ…… 変な人ね」

「何言つてんだ？ バカかおめえ」

「あん？ 調子に乗るなよ、麦わらあ…… 橋の中なら安全だとでも思つてんのかあ？ オラア！」

「コンクリートで出来た橋をペチペチと叩いた俺は、軽く力を込めてチョップを繰り出した。

バゴンッ !!

派手な音と共に砕ける石の橋。

「ウシヒロー……お前、やつぱまにヤツかあ？ 出してくれば、あいつが  
とー」

檻から飛び出たルフィは肩を回すと、お礼の言葉を述べて軽く御辞儀した。

自由奔放に見えて、要所で礼儀を押さえているのもルフィだな。

「その手があつたか

「ちゅつと!? 石を碎くなんて人間業じやないわよー。ビーフして皆驚かないのよ!!」

「いや、「ハベリソイツ等にも出来るだろ？」

「ああ、忘れてた」

「盲点だつたな」

「私にも出来るゾー！」

ルフィはソロに張り合ひ様にキキョウも話に加わり、場はカオスの様相を呈してきていた。

全すべ……ビーフしていつた？

「アンタ達は一体なんなのよ!?」

「ふふ……私は出来ないから安心して、娘さん」

叫ぶナミを慰めるロビン・ナンにに対する呼び方もおかしい

し、サッカーリの場を取めた方が良いんじゃないだ。

「待たせたなあ、海賊狩りイ！ 今からテメエを血祭りにあ、ゲエ！?  
麦わらが檻の外にい！」

大きなライオンに乗る男と一輪車に乗る男を背後に従えて、この場に戻るなりすつとんきょうな声を上げるバギー。

驚きの中にもコミカルさを忘れないバギーはやはり愉快な男であり、ゾロとの闘いを見る限り海賊としての実力も自信も信念も申し分無い。バギー個人はシャボンディ諸島で見た3200万の海賊よりも格上だろう。

問題なのは後ろに控える一人を筆頭とした手下になる……原作では無事にグランドラインを航海していたが、どうみても弱そうである。

今になつて航海プランを変更する気は無いが、腕っぷしの程を実際に確認しておく必要がありそうだ。

「麦わらなら俺が出した。頑張つて倒してくれ」

俺は何ら悪びれる事なく事實を告げる。

悪びれるどころか、ゾロ逃亡後に起つたイベントが無くなつた状況をあるべき姿に戻し、ついでにライオンと一輪車の実力も計れる一石二鳥の行いだ。

そう。

これは、バギーがブツ飛ばされる結末に導く為の然るべき行いであり、本来なら警められるべき行いだ。

口し、この理屈はこの世界の他の誰にも判らない……転生者とは、

思いの外辛いものである。

「二の派手阿呆があー、お前はどうちの味方なんだつ!？」

大砲を挟んでルフィ達と並び、バギーと向かい合つ立ち位置の俺とキキョウと二ロ・ロビン。

このシーンだけを見ればバギー達と敵対しているように見えなくもない。

「そう怒んなつて……グランドラインを制覇する『力つ鼻さんなら、麦わら野郎の一人やそこら増えたところで余裕だろ? 大体だな、俺はお前の味方になつた覚えはない……そこんとこ間違えるな』

適当におだててやると「そりゃあそうだ」と氣を良くしたバギーに向かつて両手を広げ、敵意の無いことを示した俺は、ルフィ達から離れる様に屋上を歩む。

そんな俺に黙つて付いてくる一人の女。

「何なの、この人! 一億ベリーも払つて護送を頼んだなら味方でしょ!? ……そうだ! 私に一億ベリー払つてくれたら、この一人がアンタをグランドラインに案内するわ!」

「誰が案内するつづつた!? そもそもお前は誰だつ」

「コイツは泥棒でうちの航海士だ。ナミつてんだ」

俺の背後から呼び止める様にナミが自分勝手な案を叫ぶと、ゾロが突つ込み、ルフィは呑気にナミを紹介してみせた。

戦闘前とは思えないほのぼのっぷりだ。  
もしや、「イツらにはバギーと鬭う気がないのだろうか?

.....。

これはマズイな。

ルフィがバギーと闘う様に仕向けるとした。

「お前、関係無くね？ 案内するのがその2人なら、金を受け取るのも  
その2人になるのが筋だ」

歩みを止めて振り返った俺は、首を傾げルフィヒゾロを指差した。  
「関係無くないわ！ アンタのお金は私のお金、私の受けた依頼はコ  
イツらの依頼よ。」

身ぶり手振りを交えて力説したナミは、最後にルフィヒゾロをビ  
シッと指差しポーズを決める。

「ふうーん？」

俺は3人に踏みするような視線をおくる。

イレギュラーな存在である俺達のせいか、原作ではもう少し後にな  
るナミ仲間入り（仮）が前倒し気味になつていていた。

「な、何よっ！」

「じゃあ、お前もソイツらの一昧なのか？」

「（）でもう一押ししてやれば、とつあえずナミ仲間入り（仮）は成  
立しそうだ。」

「ええ……そりね。この依頼の為なら手を組むわ、ビリ。」

「やつたー！仲間が増えたぞ」

「あん？ 話が見えねえ……説明しろつ、ルフィ」

「コイツは泥棒で航海士で仲間だ」

「説明になつてねえ!!」

「手を組むだけよつ」

そう言つたナミがルフィに手を差し伸べると、「ヒヒ」と笑つたルフィが握り返した。

なるほど……展開に多少の差異が在つても収まるべき所には收まるのか。

「コレならば、もう少し気兼ねなく動いて良さそうだな……原作を気にする余り自由が奪われそつになつていたが嬉しい発見だ。

後は、バギーをブツ飛ばせば完璧なんだが……さて、ビリなる」とやら。

「へええ～……麦わら一味結成の瞬間か？」

「そつなるわ。コレなら良いでしょ？ 1億ベリー、今すぐ払つて!!

「うん。普通に無理」

「ひよつヒ、どうしてよ!?」

「当たり前だろ？ この金は既にバギーに払つたから俺のモンじゃない。それより何より、雑用係の居ねえ麦わらの一味に俺の護送は勤まらねえのわ」

キッチリ回収しておいたアタッシュケースを軽く叩いた俺は、ナミに背を向け高く挙げた手をヒラヒラ振つて話の終わりを告げた。

ルフィとバギーを闘わせたいのは山々だが、契約を一方的に破る様な真似は出来ない。

交換条件すら破る様な人間は、その内誰にも相手されなくなるのが自明の理。

そうなつてしまえば、力付くで片を付けていくしかなくなる。

勿論、天竜人たる俺になら大抵の事柄を力付くで解決するのも可能だが、それは危ういのだ。

話し合いや金で簡単に解決出来るなら、それに越した事はないのである。

「約束が違うじゃない！」

「お前と約束した覚えはない……まあ、どうでも良いけど、手を組んだのならソイツらとの約束は違えんなよ？ 約束破りは海賊以下だぜ…………おっし、バギーさんや、待たせたな？ 思う存分闘つて、お前の有用性を俺に示せ！」

ナミの行動を狭める脅しを掛けた俺は、腕を組んで待っていたバギーの肩をポンと叩く。

ルフィから仕掛けなくとも、コイツらから仕掛けてくれれば結果は同じ。

バギーが華麗に玉碎してくれりやあ、ほぼ原作通りの結末だ。

「テメエに言われるまでもねえ……口ロノア・ゾロの首はオレ達が頂く！」

「ゾロの首はやらねえ！ お前をブツ飛ばして、グランドラインの海

図とオーザの依頼をオレ達が預いてやる！」

「ルフィ……？」

「よく分からねえけど、お前、金がいるんだろ？ デカつ鼻をブツ飛ばしたら、オーザは依頼を取り下げるつ！ そしたら依頼も海図もオレ達のもんだ」

なんとなくでもナミの抱える問題についての間にか気付いた上で、それを踏まえた問題の建設的な解決策を口にするルフィ……何も考えていない様で、本質を見抜く目があるとでも云うのだろうか。

そして、そんなルフィに嫌われた俺は、天竜人冥利に亾きむつてモンだ。

嫌われてナンボ……それが天竜人の本質であり、天竜人はそれだけの事をやってきてる。

それなのに君臨出来る……ヤハリ謎だな。

「話は見えねえが、欲しいモノは力付くで奪うつてコトか？ イイネえ、海賊らしくなつてきたつ！」

頭部に黒い手拭いを巻いたゾロが本気の戦闘体制に移行する。

「コソ泥風情が……バギー船長、あの身の程知りずの相手はワタシがしても？」

「モウジか……イイよ」

「ロロノア・ゾロが側に居るからといって、お前まで強くなるワケでは無いのだぞ……小僧」

巨大なライオンに乗ったモージと呼ばれた男がバギーの許可を得て、ルフィを小物と侮り対峙する。

.....。

「コイツ、ダメダメだな……名が通つて無いからと、侮る理由が判らない。

無名であつても強い奴は強いのだ。

バギーの後方に移動した俺は、内心でゲンナリしつつルフィとモージの掛け合いを眺める。

「楽しみね……麦わらさんほどれくらいい強いのかしら？」

俺の横で二ロ・ロビンが探るように質問するのも何時もの事だ。

「さあな……キキョウはどう見る？」

「麦わらの子供が勝つハズだが…………ふむ、悪魔の能力次第だな」

二ロ・ロビンを適当にあしらってキキョウに問いつと、早速悪魔の実の力を念頭に置いて考えている様で真剣そのものだ。  
バギーの手下とは大違ひの良い傾向である。

じつしてキキョウの成長に満足気に頷いた俺は、麦わらの一昧とバギー海賊団の決戦を、悠々と観戦するのだった。

「ゴムゴムのーっ、バズーカア!!」

ナミに胴体のパーティを縛られ手足と顔だけになつたバギーが、ゴムの特性を活かしたルフィの諸手突きに依つて、遙か彼方にブツ飛ばされた。

「勝つたあ」

瓦礫の散乱する街の片隅で、ルフィが両手を上げて勝利のポーズを決める。

ライオンが「ゴムゴムのスピン」なる技で屋上に叩きつけられ、建物が倒壊するハプニングから始まつた麦わらの一昧とバギー海賊団の決戦は、終始麦わら一味の優勢に進み、麦わら一味の圧勝に終わった。

カバジと呼ばれる男の曲技は、ゾロの三刀流の前に見せ場なく敗れ、船長たるバギーも麦わら帽子を傷付ける愚行を犯して、怒りに燃えるルフィに今しがたブツ飛ばされた所だ。

要は、原作通りだ。

「おーっ、起きるー 撤収すんぞ」

ほぼ原作通りの結末を迎えた事に満足した俺は、瓦礫に隠れて狸寝入りを続けるバギーの手下の類を叩き撤退を促す。

「うひょ、うひょっとー なに帰ろうとしてるのよ!?

約束が違つじやな

「いつ！」

「さつさも言つたよな？ 僕がいつお前と約束をした？」

「バギーを倒せば依頼を取り下げる……」これはルフィイが勝手に言ったコトであり俺の意思とは何の関係もないものである。

「……っ!? そりや約束はしてないけど、バギーを倒したんだから私達の方が強いでしょ!? ビリしてそいつらに行こうとするのか？」

「ナミ、だつたか？ 必死なのは判るが根本的に色々と間違えているぞ？ 僕は護送に強さを求めていない……欲しいのはコイツらの雑用力だ！」

手下を無理やり立たせてケツを叩いた俺は、高らかに宣言する。

「なによそれ！ 意味わかんないつ、アンタは雑用係に1億ベリーも払うつて言うの!?」

「俺にとつては雑用係に1億ベリーの価値がある……見解の相違つてやつだな。大体なあ、1人1日1万ベリーも支払えば、凡そ30人で1日30万。一ヶ月900万で一年なら約1億だ……何も高くねえだろ？ 何がおかしいってんだ？」

「根本的におかしいわよつ！ 雜用なんか自分でやれば良いでしょ!!」

必死さ故か、ナミにしては物分かりが悪すぎると、いい加減面倒だ。

だが……。

ナミの必死の元凶はアーロンであり、そのアーロンがこの東の海で暴れているのは、天竜人の愚かしさが元凶だと言える。

「うう……。

「俺の事は放つておいてくれ………… そんなに金が欲しけりや依頼とは関係無くお前に1億払つてやるのも吝かな話でも無いんだが…… 聞くか？」

「今度は一体何を企んでいるのかしら？ 娘さん、余りこの人の話を信じたらダメよ。嘘は余り付かないけど、ホントのコトも言わない人よ」

ナミが反応するより先に、能面の様な表情をしたニーハ・ロビンが茶々を入れて邪魔をする。

「つて、つめい！ お前は何を言つてくれている!?」

「事実よ」

しつつ、と短く告げるヒカルに向いたニーハ・ロビン。

見える範囲の手下達の肩に手を咲かせ、頬を叩いて起こしてくれるのは有り難いが、余計な事は言わないで貰いたい。

と、言つても聞かないのでスルーだ。

「まあ、良いや…… そう難しい話じゃない。ナミさんや、今お前が椅子代わりに使つているバギーの胴体を1億で買い取つてやる」「み

「ホント？」

「そう焦んなつて……金を払うのは俺がバギーと再会して本人に確認した後になる。さつきも言つたがこの金は既にバギーのモノだからな？ 自分の胴体に1億払うんだ……」テカツ鼻からも文句は出ないハズだ

身を乗り出すナミを片手で制して取り引きを持ち掛ける。

金を今すぐ渡しても事後承諾をバギーから得るのは簡単だろう。力付くで脅しても良いし、それ以前にバギー自身の身体だ。金に糸目を付ける様なケチ臭いコトは言つまい。

しかし、意識を加速させて考えるまでもなく、金を渡してしまつとナミがアーロンの元へと向かうのは確実だ。

そうなると、ナミの麦わら仲間入りフラグがポツキリと折れてしまう。

それは流石にマズイのだ。

「つまり、今すぐに胴体を寄越せ、金は後で払う……」こうコトから？

「そういうついた。悪い話じゃないだろ？」

金が後払いならナミは暫くルフィと共に行動するハズだ……コレが俺の狙いであり、その先にはちょっとしたイタズラ心もある。

正解な日数は計れないが1週間も有ればルフィ達は、ウソップとサンジのイベントをこなすだろ？

10日後を目処に村へ届ける約束を取り付けば良いのだ。  
原作通りの出来事が起ると仮定すれば、ナミは1億ベリーを海軍のクズに奪われる……そこで更に1億ベリーを突き付けてやるならば、どうだ？

アーロンの顔と行動が見物である。

「嫌よ!! アンタ、頭おかしいんじゃないの!? 誰がアンタみたいな人と後払いの契約なんてするもんですか!」

「そつか…………じゃあ仕方ねえ。力付くでバギーの胴体は返しても  
「ひつ」

計画失敗。

女といつのはつづく御し難いモノの様だ。

まあ、ちょっとしたイタズラ心だし素直に原作通りの展開が起る  
様に努めるとしよう。

「そら見なさいよ! 何でも直ぐに力付くつ、ソレがアンタ達懸賞金首  
の本性よ!!」

「はあ? 馬鹿かテメエ? 提案を蹴ったのはそっちだろ? 大体  
なあ……俺の提案を蹴つてどうするつもりなんだ? その二一人は  
それなりに強いが、俺の相手になる程の強さじゃないからな?」

原作を物差し代わりに考えれば、ハンコックと互角以上に闘える俺  
が、今のルフィやゾロに遅れを取るコトは有り得ない。

これはルフィ達の闘いを見て確認したコトもあり、まず間違いの  
無い事実となる。

「嘘でしょ!? 懸賞金100万ベリーのアンタが1500万ベリーの  
バギーより強いわけないわ!」

なるほど……考え無しに提案を蹴ったわけではなく、ナミは懸賞金イ

「コール戦闘力と思うタイプの人間か。

バギーを倒したルフィなら100万の俺は倒せる……瞬時にそんな皮算用が働いたのだろう。

頭の良い奴が陥りそうな単純ミスだ。

「残念だけど、懸賞金の額は強さを正解に現しているとは言えないの……言つたハズよ？ この人の相手をするだけ無駄だと。この東の海の人間では誰もこの人に勝てないのよ」

懸賞金イコール戦闘力を否定する存在の二ロ・ロビンが、ナミに事情を教える。

「…………え？」

絶句したナミが小さく一言絞り出すと、更に小さく「誰も？」と咳いている。

おそらくアーロンを念頭に置いての咳だらう。

「ま、実際にやつてみないと判らんが、とりあえずこの一人には負ける気がしねえ」

「あん？ 言つてくれるじゃねえか」

俺がルフィとゾロを指差して二ロ・ロビンの話を追認すると、ゾロだけが渋い顔で言葉を発する。

「事実だからな……それで、じつするんだ？ 俺が強いと知つて尚、取り引きには応じないのか？」

「いつもの様にブツ飛ばせばよからひ……提案を拒否したのはソコの

女だ！ 強者である貴様が何故、讓歩の様な真似をする!?

「そうね……」の街に来てからのターゲットさんの行動は変だわ。何か理由があるのかしら？」

「うるせえっ、どうじょうが俺の勝手だ！」

「たぐ……どうして『トイシ』は俺を畏れず、俺の意に反する『ト』を平氣な顔して言えるんだ？」

天竜人であると明かしてはいないが、単純な強さだけなら俺が明らかに上だ……何故、いつも畏れを抱かない？

天竜人と明かしても、一人の態度が変わらない気がしてならないし、『トイシ』と話していると自分が偉いのか判らなく成りそうだ。

「分かつた。金は後で良い」

「ちよつと、ルフィ！ 勝手に決めないでよ！」

沈黙を破りルフィが決断を下す。

「お？ 流石、船長。勝てない奴とは戦わないか……正しい判断だ」

「勝てないからじゃねえ！ お前と戦う理由がないからオレはお前と戦わないんだつ。金は後でナマに払ってくれるんだろ？」

「ああ……ナマさんや、金は10日後にノコギリつ鼻のパークに届けてやる。それまではそこいらと海賊をやってな」

「どうして？…………分かつたわ、10日後ね？ もし、約束を破つたら捜し出して取り立ててやるから」

驚きの表情を隠せなかつたナミは、俯いて少し考へると椅子代わりにしていたバギーの胴体から立ち上がり移動する。

「好きにしな……れど、とそれともアソブンズラするか」

バギーの胴体を肩に担いだ俺は、女達に撤収を告げる。

「ロビンに叩き起しきれたバギーの手下達は既に周囲に居ない様だし頃合にだらう。

「そうね  
「そうだな」

「麦わらのルフィ、だっけ？　お前等も海賊なりそろそろ逃げた方が良いぞ。街の連中が直ぐそこまで来ている」

「どうして判るのよ？」

「ふんつ……偉い俺は何でも知つてゐるのさ」

タネは原作を参考にした見聞色だが、親切に教えてやる必要はない。

「そつかあ。ありがとなー」

「礼を言われるコトでもない……が、一つ聞いても良いか？」

「なんだあ？」

「お前、なんで俺達を…………こせ、やつぱーー」

仲間に誘わない？

そう聞きたかったが、聞けなかつた。

ルフィは俺を誘わない……答は既に出てこないので。

「変な奴だなー」

「おこつ、ルフィ！ 暖<sup>ぬく</sup>気<sup>き</sup>で話<sup>はな</sup>してる場合<sup>じや</sup>じゃねえ!! ホントに街の連中が来やがつたつ、どうなつてやがる!?」

「つせせせ、逃げろー!!」

「おひしてナ!!」との約束を取り付けた俺は、逃げるよつにオレンジの街をあとにする。

「ひつ…… 口を開けば直ぐそれだ。まあ、いいや……」

原作の世界をルフィと一緒にするでなく、簡単に原作から外れる俺の冒険は、今から始まるのだひつ。

とりあえず、アーロンだな。

俺はそんな事を考えながら、夕日に染まる船着き場に走るのだった。

キキョウヒーロ・ロビンを連れた俺は、早くも「コヤシ村に到着していた。

これは、別段「コヤシ村に用が有つた訳でなく、バギーの居ないバギー海賊団と行動を共にするメリットと「メリットを秤に掛けた結果である。

と言つのもバギーの居ない海賊団は正に鳥合の集であり、単なる客人ポジションである俺に船と行動の指針を求める有り様だった。原作で描かれたバギーと手下の合流経緯をハッキリ覚えていたなら、誘導するのも若かな話でなかつたのだが、只でさえ薄れている原作の記憶。

扉絵で描かれたダケのバギーの冒険を覚えている筈もなく、辛うじて覚えていたのは『バギーと手下達は放つておいても合流する』といった事だけであり、それ故に余計な口出しをしない方が良いとの思いから、

『俺が知るかつ』

と、バギーの手下達を突き放し、ビブルカードと共に言を残して単独行動を取つた次第である。

することの無くなつた俺は、約束の日より一週間も早く「コヤシ村へ到着する羽田になり、それ以来3日で渡つて「ロビンから、ランバロ」の村だけでなく諸島全体が魚人の支配下にあるというね

『海軍と手を組んでいるらしいわ』

『ターゲットさんはこの状況を知つていたのかしら?』

『どうして暴れないの?』

『そんなに大事なの?』

等と、主語の抜けた何を言いたいのか判らない言葉も含めて、疑惑の田に晒され続けた。

困ったことに二コ・ロビンはオレンジの街以降、更に話し掛けてくるようになってしまっており、腹の探り合いを越えて少々煩わしいレベルに達しているのだ……今、魚人の皆さん方が現れたら腹いせ混じりにブツ飛ばしてやるのだが、現在のところ現れていない。

そう……現れていないのだ。

原作を知る俺は、二コ・ロビンの調べを聞くまでもなく、この村を含めて周辺の集落が魚人の支配下にあることを知っていた……この村に来るまでは辛氣臭い住民をイメージして嫌な気分になっていた位だ。

しかし、予想に反して村の住民達は泊まり客である俺達に対して営業スマイルを見せるばかりか、夜ともなれば村人同士で酒を酌み交わし談笑する程度のゆとりを持つていた。

勿論、聽こえてくる談笑内容の大半は、代名詞を用いての不平不満になるわけだが、暮らしに不満が有るのは何処の世界でもあり得る事である。

原作においてこの村の住民は、不満の矛先であるアーロン達に命を掛け刃向かう事となるのであるが……正直、何に対する不満で命を掛けるのか俺には判らないでいる。

ナミの義理の母に当たるベルさんが殺されたことに起因するのか、それとも単に貢ぎ金が高過ぎる事への不満なのか、はたまた魚人が支配者の地位に居ることに対する差別的な偏見故か……ある程度の目星を付けるコトが出来ても、どれも決め手に欠けるのだ。

ナミの義母に関して言えば、支配者に逆らい処刑されるのは割とよくある話で、これが蜂起の原因であるとするならば、天竜人は支配するべき下々民の大半から蜂起されるべきであり、支配どころではなくなるハズである。

貢ぎ金に関しても、決して安く無い額を納めているが、基本的には金さえ払えれば命を落とすことなく生活を営める。

一ノ・ロビンの調査によると、魚人達は巻き上げた貢ぎ金を集落で使い経済を循環させているらしい。

貢ぎ金は一人頭10万ゼニー……子供であつても5万ゼニーが課せられる。

搾取のみを続ければ、そう遠くない内に破綻するのは明らかであり、生かさず殺さず搾取する為にも魚人達は貢ぎ金の一部を集落で使い、仕事を与えては報酬という形で集落の人間に還元するのだろう……まあ、還元といつても元は集落の人間の金であり、実質タダ働きをさせている上手い手法だつたりする。

又、支配の為に外敵の脅威から金づるである住民を護つていたり、逃亡を防ぐ意味もあって島外との取り引きは魚人自らが行い、住民が収入を得る手助けもしているらしい。

このようにアーロン達魚人海賊団は、暴力と金と労力を巧みに使い分けて、コノミ諸島の支配を行っているのである。

つい最近、貢ぎ金が払えずに破壊された村があるそうだが、それは払え無かつたのが理由である。

言い換えるならば、多少の自由と金を引き換えにすれば、魚人達が命の保証をしてくれるのだ……そう悪い条件でもない生活のハズが、蜂起を招く。

ヤハリ、支配者が別種族の魚人であるのが蜂起を起こす最大の理由と見るべきなの、か？

それとも、貢ぎ金の支払いが滞ると殺されるのが原因だろうか？

だが、殺されるのが嫌で歯向かって殺されるなら、本末転倒としか言えないのではないか？

.....。

判らない。

判らない事は聞いてみるのが手っ取り早いが、今はまだその時ではない。

原作では、ナミの貯めた1億ベリーが奪われる出来事をきっかけとして、ココヤシ村の住民のほぼ全てが命を捨てる決意を固める……話を聞くならそのタイミングだ。

その為にも俺は何もせずに、こうじてボーッと日々を過ごす事が肝心だ。

原作は些細な事で変化する……バギーの時に原作修正に苦心するのは御免被りたい所である。

とりあえずアーロンだ……今の時点であれと会うのは色々とマズイ。

いつセ、この村を離れるのも一つの手か？

俺はこんな事を考えながら、ココヤシ村の大通りに面して造られた木製のパラソルの下で、蜜柑ジュースを飲んでいた。

天然果汁100%らしく普通に販売している……一杯1000ゼニーと少し高いのがネックだが、それだけの価値はあるだろう。

「何を考えてこらのかしら？」

そこにはやつて来た二ロ・ロビンが丸テーブルに鞄を置いて対面に座

ると、こつものように探しを入れてきた。

「別に何も……ってか、俺が何を考えていっても、お前に関係無い」

「ずれ別れる二コ・ロビン……素つ氣ない態度をとりやむを得ないが、せつかくの皿にジュークスが台無しだ。」

普通に話し掛けてくるなら普通に話してやるモノを……まあ、普通に話す関係じやないから仕方ないか。

「そうね……だけど、私は貴方が何をしようとしているのか知りたいと思うの。これは、私の自由よ」

サングラスを外しそう掛けた二コ・ロビンはいつにも増して真剣だ。

なるほど……本腰入れて俺の秘密を探らうといふコトか。

東の海に来てからの俺は、我ながらおかしな行動を取ってきた。

二コ・ロビンの探求心に引っ掛けたとしてもなんら不思議ではない。

「ふんっ……探るのはお前の自由だな。まあ、だからと言ひて親切に教えてやる義理も義務も必要もない」

「ええ、そうね……そつそつ、貴方に会いたいってお密さんを連れてきたわ」

サングラスを掛け直し両手を突いて立ち上がった二コ・ロビンは、腕を使って大通りの向こうつを指し示す。

「密だつて？」

「コ・ロジンの示す方向に視線を向ける。

そこに見えたのは、一際大柄なアロハシャツの男を先頭に、ゆつべりと此方にやつてくる20人ばかりの集団。

はあ……やつてくれるぜ、コ・ロジン。

俺の動きを確める為にここまでするか？

上手く立ち回らないと原作ブレイクは確定だな。

「シャーハッハハハ… よつこむ、下等なる人間よ… オレのシマで嗅ぎ回つてるのはテメエかつ！」

田算で三メートル。

間近までやつて来たアーロンと思われる魚人は、両手を広げて高笑いを上げるとギロリとコラリを向けてきた。

巨体故か、それなりの威圧感はあるがそれだけだ……闘つて負けるよつな相手じやなさそうだ。

「はあ？ キキョウさんや…… ロイツ、いきなりお前の事を下等扱いしてんぞ！」

後ろを向いた俺は、『苦労な事に背後で立ち続けるキキョウに意見を求める。

「ふむ…… 戦士に向かつて初対面でこの態度。許せんな」

「あら？ ターゲットさんの事を言つてゐるんじゃないから？」

「いや、違うだろ。俺は『下等なる人間』どころか偉いからな。ってか、なんでこの負け犬を連れてくるかな？」

「私の仲間に会いたいと言つから連れてきたのよ…… 何かマズかった

かしら？

シレシと言ひ「一ロ・ロビンだが、俺とアーロンを鉢合わせにすれば何も起こらないハズもなく、頭の良い彼女がソレに気付かないハズもない。

やはり、探求心から確信犯的にアーロンを連れてきたとみるべきか。

「よく言ひ……誰が仲間だ？」

言葉尻を捉えて突つ込みを入れるも、既に「一ロ・ロビンはソッポを向いて知らん顔だ。

全く……やつてくれるぜ。

「テメエっ……負け犬たあ誰の事を言つている!?」

「お前だよ、長つ鼻。情けない野郎だぜ……グランドラインで勝てないからつて、最弱の海で支配者ごつこかあ？ 魚入つてのはもつと骨のある連中だと思っていたが、あのタイガーだけが特別だったってワケか！」

十数年前に出会った鯛の魚人は、奴隸の首輪を付けられながらも、その眼と身体には霸氣を宿していた。

それに比べてコイツはどうだ……狂暴性こそ有る様だが、とても七武海の一角であるジンベエと肩を並べていたとは思えない。

つてか、絡んでくるなよな……俺の強さが判らないほど鈍いのか？

「ナニいつ！？ テメエ、鯛の兄貴を知つてゐるのか!?」

「さあな？ お前に教えてやる謂れがないし、俺はお前に用も無い。サッサと自分の城に帰つて引き込もつてな」

スナップを効かせてシッシッと手首を振つた俺は、アーロン達を追い払おうと試みる。

周囲の村人が「アイツ、なんて口を」とか「殺されるぞ!?」とか言つてゐるが気にしない。

「ニユ～。おめえ何処で鯛のお頭の事を聞いたんだ？」

「ハチつ、馴染むな。大方、聞き齧つただけだ、チユツ」

「舐めた態度の男だが殺すのもマズイ……アーロンさん、パークに連れ帰り尋問しましょ！」

「馬鹿かてめえら？ 俺はこの村で人を待つてゐるんだ……用も無いのに誰が付いて行くかっ」

「テメエに選択権はネエんだよ、人間！ チュウつ、連れてこい！」

幹部の助言を受けたアーロンが、唇の長いチュウと呼ばれた魚人に俺の連行の指示を出す。

「あいよ、アーロンさん……ぐはつ！」

座る俺の背後に回り、馴れ馴れしくも肩を抱いて來たチュウと呼ばれる魚人の顔面に裏拳を食らわせる。

暴れるのもどうかと思うが、連行されても良いこと等なく、ここに至つてはこうするしか無いだろつ。

「チュウ!?」

「なんだあ？ この程度で失神か？ お前等どんだけ弱いんだよ？」

ドサツと音を立てて背中から倒れたチュウに呆れた視線を向ける。

「よくもつ……エイフ」

お下げの魚人が駆け寄り腰を落として正拳突きを繰り出した。

正確な型だがモーションがテカいし遅すぎる。

「あせるかつ！」

突き出された魚人の拳をキキョウが横から片手で受け止めた。

ま、そうなるわな。

「なにつ！ ぐはつ」

伸ばされた腕を掻い潜ったキキョウが魚人の腹部に掌底を放つと、魚人の巨体が勢いよく後方に吹き飛び、大通りを挟んだ向かいにある家屋の壁へと激突して白目を向いた。

「クロオビツ！」

「おらつ、雑魚は大人しく引き込もつてろ。俺に話が有るなら

…… 4日後に聞いてやる」

倒れたチュウの衣服を掴んだ俺は、アーロンに向けて放り投げた。

「下等な人間が同胞に何をした!! これ程の事を仕出かしたお前達を

黙つて見過ごすとでも思つてゐるのかあ!!

投げられた魚人をガツチリ受け止め、近くの魚人に預けたアーロンが凄みながら近付いてくる。

ナミが麦わら一味に正式加入するまで、アーロンに手を出したくなかったのだが、舐めた態度で掛かってくるなら仕方ない。

「やれやれだ……仕掛けて来たのはお前の方だろ? 魚人つてのはどんだけ被害者ヅラが得意なんだ?」

俺は肩を竦めて御手上げのポーズをしてみせる。

手を出したのは俺が先かも知れないが、俺の自由を奪う連行を仕掛けたのは魚人の方だ。

人の権利を奪おうとすれば、時に手痛いしつペ返しを喰らう……

アーロンはこんな当たり前の事も知らない馬鹿なのか?

「テメエっ!!」

前方の視界を遮る迄に近付いたアーロンの巨大な握り拳が木製のパラソルを打ち壊し、俺の頭上から振り下ろされる。

「ふんつ……やつぱこんなもんか? 2000万っこたあないが、4、5千万が良いとこだな……オラあ!!」

俺は繰り出されたアーロンの拳を指先で受け止め、ソレをテコピエンの要領で弾き、突き出た顎を狙つてラッシュを繰り出した。

「なつ!? 下等な……人間がオレにつ……」

「黙れ……俺を下等な人間と一緒ににするなっ」

フラつきながらも両腕を伸ばして掴みかかるつとしてくるアーロンの腹部にアッパーを叩き込むと、前のめりに倒れ俺の身体にのし掛かる。

魚人も生物に代わりなく、脳を揺らしてやればザツとこんなもんだ。

「アーロンさんっ!?」

「まさかっ!? アーロンが!?」

この光景を見ていた魚人だけではなく、村の連中もどよめいている。

これは……かなりマズイな。

この状況から原作修正って可能なのか?

まあ、やつちまつた事は仕方ない…………あとは原作の修正力に期待しよう。

「ニユ～……おめえら、皆を連れてパークに帰るぞ」

額を搔いたタコの魚人がおあつらえ向きに撤退を告げる。

「おう、そうじろタコ助……おらつ、シッカリ受け取れ!」

俺は渡りに船とばかりに、タコ助に向けてアーロンを放り投げた。

「ニユ～……すまねえなあ

「気にすんな……つてか、お前ハチだろ? なんでアーロンなんかと

つるんでるんだ?」

あ、しまった。

ハチの醸し出す狂暴性とは対極にあるノンビリとした雰囲氣に、俺は思わず余計な口トを口にする。

アーロンを含めて聞きたい」と、言いたいことがあるには有るが、今はまだその時ではない。

「顔が広いのね」

すかわすー! ハ・ロビンから突っ込みが入るも、華麗にスルーだ。

「そんな事言われてもアーロンさんは仲間想いのイイヤツだからなあ……仲間は裏切れねえ。って、おまえオレの事も知つてんのか?」

「ん……お前は、俺の知り合いの恩人、らしい。話しに聞いていたダケで、お前と会つたのは今日が初めてだ」

こんな話はレイリーから聞かされていないが、内容自体は真実だ。俺の誤魔化しがバレる口トもないだろう。

「ホントかしら?」

「にゅ~? 恩人……? あ、そのマントつおまえレイリーの知り合いかあ!?」

四本の腕を使ってアーロンを頭上に持ち上げるハチは、残り一本の手をポンッと打つては「懐かしいなあ」と勝手に納得している。

「コ・ロビンは、レイリー？」と訝しげだし、村人達は、「アーロンがイイヤツだと!?」「ふざけるなあ!!」と、息巻いてるし正直勘弁してほしい。

「おらっ、無駄話は良いからサッサと帰れよ？ 暴動に成っても俺は知らねえからなつ」

俺の半ば投げ槍な言葉に他の魚人達も慌ただしく動き、倒れたチュウとクロオビを協力して抱え、今来た道を引き返していった。

その様子を憤慨しながらもただただ眺める村人達……頼むから手出しありでくれよ。

今を好機とみて闘い死ぬのは村人達の自由だが、俺のプランが狂ってしまう……ナミだけは麦わら一味に欠かせないのだ。

他の誰が欠けても麦わらの一昧でなくなるが、中でもナミは格別だ。

おそらく、ナミが居ないとマトモに航海できず、ルフィは僅く海の藻屑と消えるのだ。

俺は祈るような気持ちで魚人達の撤収を見守るのだった。

魚人の撤収が滞りなく終わり一段落を迎えた俺達は、丸テーブル圍んで蜜柑ジュースを飲んでいた。  
解せないコトに、御代は全て俺持ちだつたりする。

「捕えなくて良かつたの？」

主語の抜けた二コ・ロビンの言葉だが、さすがにコレは想定内。

「捕える必要があつたのか？」

わざとらしく小首を傾げた俺は、意地悪く質問に質問を返してやる。

「村の人達が困っているわ」

「そうみたいだが、それは俺に関係の無い話だ。誰かが困っている度に助けていればキリがないし、そもそも、村の問題を何とかするのは村人自身のハズだろ？ 俺が勝手に助けてどうなるもんでもない」

「厳しい意見ね……だけど、貴方に倒された魚人達がハツ当たりで暴れても、俺に関係ないと見えるのかしら？ 彼等、理知的には見えなかつたわ」

なるほど……その発想は無かった。

アーロン達が腹いせに他の村で暴れるのは、十分に考えられる事態だ。

それどころか、再び俺に向かってくる可能性も大いにある。

「それはマズイな……一応、釘を刺しておくか」

「おかしな事を考える男だ……奴等が暴れてマズイなら、捕えて海軍なりに突き出せば良からう」

キキヨウの意見は至極尤もだが、そつは出来ないのが転生者の辛い

「トコだ。

「海軍はマズイだろ？ な？ 」「さる」

「そつかしら？ 護衛さんが連行すれば良いし、しっかりと縛れば村の人達が連行するのも可能よ……最悪、殺すのも仕方ないわ。彼等はどうの道賞金首……そつかない理由は何かしら？」

真っ直ぐ見詰めてくる。「ロビンは一体俺をどうみていのだろ？」

よもや転生者と気付くよくなつては有るまいが、これ以上行動を共にするのはマズイ気がする。

いや、既に手遅れかも知れない……今日の様な事態を招いたのは一重に、二ロビンの『』見る影響力を甘く見ていた俺の責任だ。

それにしても、二ロビン、か……世界政府に追われる悪魔の子。しかし、その実はこの村の心配をする極普通の女。

頭の良すぎるのがタマにキズだが……まあ、一緒に歸て楽しい女だったのは、殆ど出来ない事実になるか。

だが、それもこのコヤシ村を出るまでだ。

「あの…… ようじですか？」

俺と二ロビンが見詰め合ひ微妙な空気が漂つ中、見知らぬ女が割り込んできた。

「ん？ なんか用か？」

「てか、誰だコヤツ？」

見覚えが有るようでピンとこない。

「お願ひどすつ！ 魚人をつ……アーロンをつ、倒し……「え、殺して下さこ！」

こきなり現れた薄紫の髪の女はそれだけ叫ぶと、頭を地面に擦り付けるよみに土下座した。

「やなこひた」

「え……？」

「ナ一一を惚けてる？ なんで俺が見ず知らずのお前の頬みで殺しをしなきやいけねーんだ？ 何の得にもなりやしねえつづーの」

「ならば、金を払えばやつてくれるのか!?」

今度は帽子に風車を着けた全身傷だらけの男が口を開く。

「この親父は確か原作キャラだな。

「そりへるか……んじゃ、一億の現金一括払いと考えてやる

この村にそんな金が無いのは原作的にも明らかだ。

俺がアーロンを始末する訳にもいかないし、ソレっぽい理由を明確にしてサッサと諦めてもらおう。

「そんな金有るわけ無いじゃないか！ アンタ、その女に聞いて知ってるんだろ？ この村がどうこう状況に置かれているのが…」

今度はさつきの土下座女が立ち上がりて捲したててくる。

「Jの口調には覚えがある……『イツ、ナミの義姉じやねーか。

はあ……なんで原作キャラばっか寄つてくるかな？

「知つてたからなんだってんだ？ そんなもんは俺が動く理由にはならねえ。大体、一億つてのは妥当な金額だぞ？ アーロンを殺すコトでお前等が助かるとすれば、むしろ安い位だ……違つか？」

「……っ!? だつたら一億の代わりにアタシがアンタの物になる!! それで良いだろ!?」

ナミの義姉は刺青の入った胸元を叩いて仕切りにアピールしているが、何がだつたらで、それで良いのか皆田見当もつかない。そもそも人は売り買いするようなモノでなく、オマケにコイツは気が強く、ナミの義姉つて付加価値まで付いてくる。

幾らであろうが絶対に買いたくないぞ。

「……お前が一億？ 馬鹿じやねーの？」

「貴様つ!! この娘の覚悟を嘲笑うつかつ」

「何を怒つてんだ？ 逆だ、逆。一説によると、人の命は世界より価値があるとされているんだ……たかが一億とソイツじや釣り合つワケがない。不釣り合いな取引は俺の趣味に合わねえんだよつ」

俺は、僅かに残る前世の知識を使って煙に巻こうと試みる。  
駐在も義姉も面食らつた様な顔で固まつているし、どうやら上手くいきそうである。

「ふふ……残念ね、お一人や。貴方達の反逆の意思は聞かなかつた  
アーティあるから、私達のことは放つておこして貰へれる?」

「勝手に決めんなよ。……が、『マイシの言つ通りだ。さつきの件でアーロンが暴れな』いよもしてやるから、俺をアテにするのは止すんだな……俺はアーロンを倒さねえ」

ヒヨウでも、アーロンをビビりさせて説得すれば良このやう。

いつしでアーチ原作ブレイクを果たした俺は、半ば諦めの心境で駐在達を追い払い、ナミが現れるまでの数日をビビり乗り切るか頭を悩ませるのだった。

あれから2日。

心配していたアーロンの報復行動やハツカリ行動等の原作から大きく外れた動きは見られないまま、ナミは「ノノミ諸島への帰還を無事に果たし、長鼻の男が村の周りを騒がせている。

すっかり指定席となつたオープンカフェで窓ぐらの視界の先では、アーロンが駐在と揉めているし、あとは「その時」が訪れるのを静かに待てば良いハズだ。

一時はどうなることかと思つていた原作展開は、ある程度修正されたとみて良さそうだ。

それもこれも一重に、ニコ・ロビンの長年に及ぶ逃亡生活で培つた交渉術のお陰である。

『ターゲットさんには任せておけない』

いつ言つて自ら交渉役を買つて出たニコ・ロビンがキキョウと一緒にアーロンパークへと向かつたのは、魚人達をブツ飛ばしたあの日の事だ。

万一に備えて門の外で見聞色を使って聞き耳を立てていた俺の心配を他所に、彼女は見事に魚人達を説得してみせたのだ。

手始めにアーロンの失神を油断からくるラッシュキーパンチであるとして持ち上げた彼女は、俺の目的を待ち合わせと言い切り、俺達と敵対するコトの無意味さを説いた上で、此方には敵対の意志がないスタンスを平然と貫き、更には俺達が賞金首であると伝えて数日間の滞在許可を勝ち取つたのである。

言葉にして纏めると簡単に聞こえるかも知れないが、相手は怒り狂

うアーロンと魚人達。

一步間違えれば命の危険に晒される交渉であり、彼女にどんな思惑が有つて交渉を買って出たのか今以て謎である。

何処からか用意した自身の手配書を見せる荒業まで行つた一二〇・ロビンだが、そこまでしてアーロン達を抑える理由が有つたのだろうか？

それに…………力に勝る魚人を相手に一步も引かなかつた彼女の姿は称賛に値するが、それと同時に物悲しさを覚えるのは俺だけだろうか？

荒ぶる相手との交渉のキモはなんといつても度胸だ……そして、度胸は場数を踏むことに依つて身に付くのである。

彼女が交渉上手なのはそれだけの場数と苦労を重ねた証であり、その姿は原作でも少し描かれていた。

#### 『真実の歴史を知りたい』

言葉にすればたつたコレだけの望みを叶える為に、人の心までもを犠牲にする一二〇・ロビンの半生はあまりにも悲しく、そのハードルはあまりにも高い。

彼女の望みは天竜人である俺ですら手に入れられなかつた世界の秘密であり、凡そ一般人である彼女が手にするのは不可能と言つて過言ではない……原作の一二〇・ロビンは真実の歴史を手に入れるコトが出来たのだろうか？

俺は、ふと頭に浮かんだ事を考えながら、向かいに座る一二〇・ロビンに視線を送る。

「何かしら？」

視線に気付いたのか読書に励む二口・ロビンが顔を上げた。

この諸島に来て以来色々と動き回っていた彼女だが、今はこうしてゆったりと過ごしている。

そんな彼女は今日も露出度の高いヘン出しスタイル……この島は比較的温暖な気候だが恥ずかしく無いのだろうか？

「別に何も？　ただ、二口さんが交渉役を引き受けた理由が気になつてな」

「貴方に任せたわけない……そう言つたハズよ」

「だから、交渉を俺にやらせて魚人達をブツ飛ばすコトになつたとしてもだつ、それはお前にとつてどうでも良いことだら？」

「貴方にとっての不都合な結果と思つたんだけど……間違いかしら？」

事実を言ひ当てる二口・ロビンは、つまらないやつに膝に乗せた書物へと視線を落とした。

「またその話か……飽きもせぬよくやる」

「つるせえつ、俺だつてやりたくてやつてんじやねえんだよ！」

呆れ眼のキキョウが割り込んで来るのも当然で、これは既に何度か繰り返された会話だ。

しかし、俺にとっての不都合と認めるコトが出来ず、結果、俺の為に交渉してくれたのか？　とは聞けず、同じコトの繰り返しとなるのである。

「いい加減お互いに素直に話せばいいんだ?」

「ふんつ、俺はいつだって素直だつての」

「そうだな……グランドラインでの貴様は誰が相手でも物怖じせず、襲い来る海賊、気に入らない海賊とみれば容赦なく沈めたモノだ。ともすれば乱暴者と見られるが、己の心のみに従い一貫して暴れる姿は貴様の唯一の美点だったのだ。それが、この海に来てからはどうだ?」

「……何が言いたい?」

「私は貴様の護衛としてここに居る。故に、貴様の行いにつべこべ言う舌を持たぬ……しかし、だ。心を持たぬ人形でもないのだ!」

何か不満でもあるのか、長々と語るキキョウは独りでにエキサイトしていき、語尾を強めて丸いテーブルをバンッと叩いた。

「何を当たり前な?」

「力こそ全てつ! 強い者が正義!! そんな島で生まれ育った私であつても、この村の状況には怒りを禁じ得ぬのだ!! 暴力に任せて力無き者を虐げるつ、それがこれ程醜く、悲惨な姿に成るつとは……見てみよつ、直ぐそこで行われる不埒な行いをつ! 貴様は何故黙つて見ているつ! 村の者達の声無き叫びを聴いていないとは言わせぬつ!」

俺の呟きも聞かず、丸いテーブルをバンバンと叩いて力説したキキョウは、揉めるアーロンと駐在を指差した。

外界と隔絶された島で暮らしを営んでいたキキョウですが、この村の状況は腹に据えかねるらしい。

人間であるキキョウが一方の事情ダケを知つての怒りだが、力による強引な支配は万国共通で反感を覚えるとみて良いだろう。

だが、そうなると天竜人はマジで何なのだ？

俺が観た限り、天竜人は反感を抑える目的で手心を加える様な真似は一切していない。

と言うより、支配的な政策をほぼ行つていない。

ただ気儘に暮らす支配者として君臨し、正義を標榜する海軍が全力で護る……全く以て不可解としか言えないな。

そもそもアーロンのこの村での行いは、元も正せば天竜人が原因であつたりするわけで……まあ、だからと言ってアーロンを単なる被害者と言つには問題が有りすぎるし、疑問もある。

……。

とりあえず「その時」が訪れた後にアーロンから話しを聞くとして、先ずはキキョウを黙らせよう。

このままでは魚人に絡まれ兼ねない。

「いや、聞いてないし。俺は通常、盗み聞きをしないからな？ ってか、話す舌を持たぬと言つておきながら、舌の根も乾かぬ内にソレかよ？」

見聞色の霸氣は便利と言えば便利だが、扱い方が非常に難しい。中でも読心術的な業は一際難しく、意志の籠つた思考をすくい取る様な感覚であり、相手次第で断片的な情報しか得られないことも珍しくない。

例えば偶然出会つた相手から『ムカつく…』と感じられたしても、何に対してなのか、誰に対してなのか判らないのはよく在る口で、誤解を招く恐れはあるのだ。

それと、天竜人たる俺に向けられる感情の99%は負の感情だったりするわけで、イチイチ読み取る意味がないのも見聞色を使わない理由だ。

世界の全てが俺を個人ではなく天竜人と見なし、負の感情をぶつけてくるのであれば、俺は天竜人として振る舞うのみだ。

そう……相手の気持ちなど天竜人には関係無いのである。

……っと、思考が逸れたな。

「貴様つ」

俺の指摘で自己の矛盾に気付いたのか、顔を紅くしたキキョウが立ち上がる。

「ダメよ、護衛さん。都合が悪いとはぐらかす……この人の何時もの手よ」

「失礼な、俺は間違つた事は言つてないぞ？」

「そうね。だけど、それは人としてどうなのかしら？」

「普通に最悪だな」

情に訴えているつもりだろうが、俺には通じない……何故なら俺は天竜人だ。

イチイチ情に流されていては天竜人などやってられないのである。

「変な人ね……最悪だと思つているなら直そうと思わないの？」

「思わん。入して最悪でも俺として生きる分には何の問題もない。お

前だつてそつだろ、一二〇・ロジン？ 悪いと知つて我慢が出来たり、簡単に改善出来るなら誰も苦労しねえよ」

暗に「お前も同類」と告げてやる。

一二〇・ロジンも自らの夢のために悪事と知りながら悪事を重ねている。

「うチクリと書いてやれば、口を閉ざすか話題を変えるのが一二〇・ロジンだ。

「そうね…………といひで、あの泥棒娘さんは一億ベリーで魚人から村を買い取る約束をしていいそうね？ 貴方が渡そうとしているお金も一億ベリー……偶然かしら？」

「はあ？ なんでお前がそれを知つている!?」

思惑通り話題転換に成功するも、その内容に思わず声が裏返る。

「先日、私が見聞色で臍気に感じた事を頼りに、ロジンが村人に聞いて回つたのだ」

先日？

アーロンをブツ飛ばした時か？

確かに、自分の事より「コレでナミちゃんが救われる！」と安堵していた村人連中の強い意志が、聞くとは無しに聴こえたが、見ず知らずの人間が問い合わせて答える様な話ではないハズだぞ。

「調査能力有りすぎんだろ…… 一体どんな聞き方したんだよ？」

「秘密よ。だけど、村の人達が簡単に教えてくれなかつたのは確かね。それなのに、どうしてターゲットさんは知つていたのかしら？」

「知つてたなんて言つてねえしつ。ナミと取引した金額が一億なのは偶然だ、偶然！」

「全くつ……どうして何時もそうなのだ？ ロビンは貴様が海軍を追い払つた事や、海軍に追われるのを自分のせいにしなかつた事を感謝しているのだ。そして、貴様が気にかけるナミという女との関係をつ、んぐ！？」

「よつと、キキョウ!? この人には言わないでつて言つたじやない！」

顔を赤らめた二コ・ロビンがキキョウの口元に手を咲かせて強制的にその口を開ざす。

それを合図に移動した二コ・ロビンは、キキョウと揉み合いながらあやあきやあと騒ぎ始めた。

「イシ、……緊迫感の漂つ村中でナニやつてんだ？  
てが、二コ・ロビンとキキョウは二つの間に二れ程仲良くなつたんだ？」

『そんな勝手な話があるかつ、アーロン!!』

俺達が實に意味のない会話を重ねる内に、アーロンと駐在のやり取りは佳境を迎えていたようだ。

家屋と家屋の間からナミの義姉が飛び出し、必死にアーロンに食い下がる。

『そうだ、そうだ！』

『止めてくれえつ』

『ゲンさん放せつー』

それに呼応するかの様に村の者達が集まり、口々に不満を述べている。

俺がアーロンならこの時点で殺しあしなくとも、ブツ飛ばしは確定だ。

この状況でも言葉で応じるアーロンは、マジで話の判る合理的な奴なのかも知れない……惜しむらくは、支配の方法と怒りの矛先を間違えているコトだな。

『みんな戻れつ……』ここで暴れでは8年の苦労が無駄になる!!』

地面に投げ付けられたゲンさんが血べドを吐きながらも、いきり立つ村人達を收めようと/or>て立てる。

『シャーハッハッハー!』

高笑いを上げるアーロン……そして、家屋の裏手に回ったウソップが屋根によじ登るつとじて立てる。

よしひ、順調だ。

「そりだつアンタつ！ 女一人侍らせていい氣になつてないで、なんとかしてよつ！ このままじゃゲンさんが殺されちまうよつ！」

順調と思つたのも束の間、ナミの義姉が俺達の方へと進み叫んだ。

「はあ？ なんで俺に振るかな？ 大体、お前らは生きる為の闘いと銘打つてアーロンの支配を受け入れたんだろ？ だったら、ルールを破つたそのオッサンが悪いんじやねえか

「アンタねえ!!」

「ノジ」「止せつ……その男が我等の為に動くよつた男なら、今頃いつ成つておらん!!」

「シャーハッハッハ! その男はオレ達と取り引きをしているつ……ソイツは判つてんだよつ、ワッキーパンチに一度はねえつてコトがよお!! 今度やり合えば死ぬのは自分だつてなあ!!」

恐るべきは一コ・ロビンの交渉術だな……じこまでも思考の誘導が可能なら最早マインドコントロールの域である。

自分が倒されたのは油断が全てとの一コ・ロビンの言葉を信じるアーロンは両手を広げ、さも強者は自分であるかの様に振る舞つている……実際は、何度も俺の勝利は揺るがないのだが黙つておくか。

じつして俺が異を唱えないコトでアーロンの宣言は真実となり、村人達は露骨にガツカリとした表情を見せつくるが、それも今日で終わりを迎える。

原作通りにルフィイアがアーロンを倒したら表面上は一件落着だ……まあ、アーロンを倒したダケではホントの解決にはならなかつたりするのだが、アーロン退治のその先は、俺の問題だ。

「そんなつ……アンタ最低ねつ!!」

「いやいや、おかしいだろ? じつして俺が非難めいて言われなきやならない? 関係無いヤツでもお前らの為に動かなきや悪いってのか?」

「つ!? この人でなしつ!!」

「俺は人じやねえからそんのは当たり前だ」

「なんだあ？ テメエ、同胞か？」

「魚人つてのは視力が悪いのか？ 俺のどこをどう見たら魚人に見える？」

「……フンッ。テメエが何者だろうが関係無ねえ。命が惜しければソコで黙つて一人の処刑を見ていろつ」

「二人だと!? 駐在だけじゃないのか？」

原作から外れた展開に俺は思わず立ち上がりアーロンに問い掛ける。

つてか、またかよ……。

原作を近くで見てているだけで影響を「えてしまつ……これはもう、原作展開の為には原作見物を諦めるしかないつてコトか？」

……。

いや、違う。

見ることの出来ない原作を維持する意味が俺にはない……諦めるとするなら原作に忠実な展開の方だ。

しかし、未来知識とも言える原作展開を手放すのも惜しい気がするし……「こは、思案のしごころか。

「その女には反乱の意志がある！ ナミの関係者だから多目に見てやつてきたが、テメエとの会話は見過しせねえ……」これは、明らかに

「反乱の意志だ!!」

「ん? まあ、そうだな……」

「もつともなアーロンの意見に、それだけではない俺は気のない返事をするに留める。

誰がどうみても反乱の意志があるどころか、実際に殺害依頼も受けているし、下手な反論は更なる不測の事態を招きそうだ。

「大変ね。このままだと貴方のせいで人が死ぬわ……どうするの?」

キキョウとのじやれあいを終えたのか、普段の平静さを取り戻した二口・ロビンが隣で呟いてくる。

相変わらず痛いところを突いてくる女だ。

そこらの他人が自分の意思で勝手に死ぬなら俺の知ったことではないが、俺のせいだとなると話は違ってくる。

なんというか、寝覚めが悪いことでも言つのだろ? 天竜人によるまじき下らない感情論だ。

「ちひ……言われなくても女の方は俺がなんとかするわ」

「駐在さんは見殺しにするの? アーロンは貴方のせいで墮ちた威儀を取り戻す為に、彼を殺そつとしているんじゃないから?」

「はあ? それは?」

違うだろ!?

と、喉まで出かかった言葉を飲み込む。

なるほど……駐在が殺されかけるのは原作通りの展開で俺は何の

関係もないのだが、原作を知らない二口・ロビンはこんな言い分が通用しようハズもない。

二口・ロビンにとっては駐在の特境も俺のせいに見える訳か……これは厄介だな。

「どうするの?」

畳み掛けのよつて同じ質問をぶつけてくる二口・ロビン。

くそつ。

ウソップは何をしている!?

アイツが登場してくれりやあ原作の流れに戻り、駐在もノジマも死なずに済むんだつ。

俺は見聞色で把握しているウソップが居るであれつ屋根の上に、チラリと視線を向ける。

それに釣られる様に顔を向けた二口・ロビンは「あひ?」と小さく呟いた。

『これが、見せしめだあ!!』

俺達が余所見している間にも話は進み、駐在を乱雑に掴んで軽々と振り上げたアーロンが地面に叩きつけよつと威勢を発する。

『火薬星つ!!』

ウソップの狙撃がアーロンの顔面を的確に捉え煙を上げると、手放された駐在が地面に転がり窮地を脱する。

『オレは勇敢なる海の戦士、キャプテン・ウソップ!!』

屋根の上で膝をガクガクと震わせながらウソップが名乗りを上げている。

よしひ、これでいい。

あとはアーロンにお帰り願えば良いだけだ。

「いつになると知っていたのかしら？」

「……ウソップとやらが何かしようとしていたのは気付いていた。キョウにも判つたよな？」

「そうだな……魚人と駐在に意識が集まる中で、あの男だけが別の方に向を向いていたのは私も確認していた」

「そう……便利なのね」

納得したのか定かでないが、口を開ざした二郎・ロビンはソッポを向いた。

何か感付いている様だし二郎・ロビンを連れ歩くのもそろそろ限界だな……アーロン遍が終わればルフィにでも押し付けるか？

これも原作ブレイクだが、俺が連れ歩くよりかはマシだろう。

『下等な人間がオレに何をしたあ！？』

激怒したアーロンがウソップの立つ家屋をガシッと掴み、持ち上げようとも力を籠めている。

ヤらせねえよつ。

「ストップだ、アーロン。その家屋には俺の荷物が置いてある……俺達には手を出さない。それが約束だろ？」「

「テメエつ……！」

素早く移動した俺は、上から押さえる要領でアーロンの腕を掴んで制止を試みる。

「そう睨むなつて馬鹿力め……大体、無駄に村を破壊してどうする？取り口が減つて困るのはお前さんだぜ？」

「減れば増やすまでよつ！」

「馬鹿か、テメエ？ 支配地域が広まればその分苦労もテカくなるつての……おいつ、魚人共！ ボサツとしてねえでこの馬鹿力を止めやがれっ」

俺達のやりとりを啞然と見ている魚人達に努めて軽く言つてみたが、俺の内心はヒヤヒヤものだ。

と言うのも、「魚人は産まれながらにして十倍の筋力」との触れ込みは伊達ではないらしく、アーロンは体勢有利な俺と拮抗する馬鹿力を發揮している。

それにも……コイツはほづくづく惜しい男だな。

霸氣も纏わざ生身だけでこの力……極めれば天竜人の力にだって抗えたんじゃないのか？

俺はそんな事を考えながら混沌とする場を纏め、「その時」が来るのを待つのだった。